

2019年10月28日

第1回
厚生労働省指定 臨床実習指導者講習会
(長崎県講習会)
報告書

2019年10月19日～20日

長崎リハビリテーション学院

(長崎県大村市)

1. 講習会の名称：「厚生労働省指定臨床実習指導者講習会（都道府県講習会）」

2. 主催：一般社団法人全国リハビリテーション学校協会

一般社団法人日本作業療法士協会

公益社団法人日本理学療法士協会

3. 運営担当：一般社団法人長崎県作業療法士協会

4. 開催日：2019年10月19日（土）～ 10月20日（日）

5. 会場：長崎県大村市 長崎リハビリテーション学院

6. 主催責任者：

高木邦格（一般社団法人全国リハビリテーション学校協会 理事長）

中村春基（一般社団法人日本作業療法士協会 会長）

半田一登（公益社団法人日本理学療法士協会 会長）

7. 運営責任者：沖 英一（一般社団法人長崎県作業療法士協会 会長）

8. 講習会世話人名簿（別添1）

9. 講習会参加・修了者名簿（別添2）

10. 講習会の目標（学修目標）

目的：作業療法臨床実習において、効果的な臨床実習を円滑に行うために必要な知識を習得し、指導方法を身につける

講義・演習テーマ	学修目標
講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する
演習1 一般目標と行動目標	
講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	作業療法臨床実習における実習指導者の役割、学生の現代気質と実習中の心の機微およびその対応方法について理解する。
講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと 指導ポイント コーチング・ティーチング	作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学一模倣一実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した指導方法について理解する。
演習2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施 の実践	
講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、 ハラスメント、リスク管理、個人情報保護	作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する。また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。
演習3 ハラスメント防止	
講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割（OSCEの活用）	作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特にOSCE活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。
演習4 臨床実習における学生評価 重点ポイントの整理、実習遂行が困難な学生への対処法	
講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論・卒後教育との関連	作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもといた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。
演習5 多職種連携	
講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント（MTDLP）	MTDLPを活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLPの活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。
演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	
演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。
演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	見学一模倣一実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

11. 講習会のプログラム表

<1日目>

時間	講義内容	主担当
9:30~9:35	開会 オリエンテーション (講習会の進め方)	井戸
9:35~10:05 (30分)	講義1 理学療法士、作業療法士養成施設における臨床実習制度論 意義・目的・内容・仕組み	荒木
10:05~11:05 (60分)	演習1 一般目標と行動目標	福島
11:05~12:05 (60分)	講義2-1 臨床実習指導方法論① 学生の特徴と対応 対象者の捉えかた 臨床実習指導のあり方	塚本
12:05~13:05 (60分)	講義2-2 臨床実習指導方法論② 見学・模倣・実施プロセスと指導ポイント コーチング・ティーチング	中村
13:05~13:55	昼休み 50分	
13:55~15:25 (90分)	演習2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の 実践	牧野
15:25~15:55 (30分)	講義3 臨床実習における管理・運営 臨床実習の基本構造、ハラスメント、リスク管理、個人情報の保護	田中
15:55~16:55 (60分)	演習3 ハラスメント防止	井戸
16:55~17:05 (10分)	休憩	
17:05~18:05 (60分)	講義4 臨床実習における学生評価 教育評価の意義 学生評価とは 評価の側面と役割 (OSCEの活用)	丹羽
18:05~19:35 (90分)	演習4 臨床実習における学生評価の実際 重点ポイントの整理および実習遂行が困難な学生への対処法	丹羽

<2日目>

9:00~9:30 (30分)	講義5 職業倫理および連携論 多職種連携・チームワーク論、卒後教育との関連	末武
9:30~10:30 (60分)	演習5 多職種連携	末武
10:30~11:30 (60分)	講義6 臨床実習指導方法論③ 生活行為向上マネジメント (MTDLP)	村木
11:30~13:00 (90分)	演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践	村木
13:00~14:30 (90分)	演習6-2 事例報告書の作成 事例報告書の作成指導・報告の仕方 臨床思考過程の理解と指導	丹羽
14:30~16:00 (90分)	演習7 作業療法参加型臨床実習の理解 作業療法参加型実習のあり方 臨床実習プログラムの立案	丹羽
16:00~16:05 (5分)	閉会・事務連絡	

*尚、演習は世話人全員がファシリテーターとなり実施致しました。

演習6-1は昼食を取りながら実施致しました。

12. 演習内容

(学修目標、発表の要点、グループワークで議論された内容、感想)

グループ数：13グループ

会場風景



- ① 演習 1 一般目標と行動目標
- ② 演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床の思考過程の見学・模倣・実施の実践
- ③ 演習 3 ハラスメント防止
- ④ 演習 4 臨床実習における学生評価の実際
- ⑤ 演習 5 多職種連携
- ⑥ 演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践
- ⑦ 演習 6-2 事例報告書の作成
- ⑧ 演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

演習 1

一般目標と行動目標

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 1 世話人氏名：池田朋代

GW 司会者：下濱太陽 記録者：木山絵理 発表者：踊瀬脩大

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導體制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 作業療法の楽しさ
2. 自発性
3. 社会性

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

実習生の自発性

概要を知ってもらう

作業療法の楽しさ

実習自体を学んでもらう

患者様と話せる能力

笑顔など表情

社会人としての常識、礼儀

感想

いろんな分野の病院・施設の意見交換ができて参考になりました。作業療法の楽しさを伝え、又、社会人としてのマナーを伝えられたらよいと思います。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 2 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者： 中山真一 記録者： 杉村彰悟 発表者： 吉村克己

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. OT の楽しさ
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・実習導入時に、なぜ OT になりたいのかを問う。
- ・OT の魅力を伝える。OTR 自身を使った療法なので、個の魅力を伝えるようにしている。
- ・回復期の時は、検査や ADL を見せるときはアイデンティティが伝わりやすかったが、急性期ではやや難しいところがある。それを一緒に考えていく作業、促しを心掛けている。
- ・介護保険領域では、OTS 自身に会話を通してコミュニケーションを中心にかかわってもらっている。生活面を中心にかかわっていてほしい。観察や会話の中で！
- ・OT がその行為が何のために必要なのかを考えてもらう作業を行っている。
- ・人間性であったり、社会性をはぐくんでほしいと思う。自分自身の人間性を見つめなおして、それらを経験して、学んでほしい。

感想

実習生に対し、学んでほしいことについてはセラピストの置かれている状況・環境により、様々な意見が出された。その中でも実習生に対し、OT という職能の魅力を伝え、目指すべき OT として手本となるようサポートしていくことの大事さを感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 3 世話人氏名：鎌田 秀一

GW 司会者：田川良枝 記録者：川崎めぐみ 発表者：大曾史朗

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 人間性
2. 主体性
3. 測定、検査、評価について

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

○行動目標

- ・報連相ができる
- ・接遇(提出物の期限を守る、決まりを守る)
- ・コミュニケーションをとれる
- ・現場でやっていることの質問ができる

○一般目標

- ・精神科の概要をとらえる
- ・測定、検査、評価の区別。なぜ評価を行うのか理解できる
- ・わからないことがわかる

感想

学生に知識や、技術の獲得を求めがちだが、メンバーの意見をきいていると、実習を通して作業療法士の良さやたくさんの患者様に触れてもらうことを、指導者みんなが望んでいることがわかった。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 4 世話人氏名： 桑原 由喜

GW 司会者： 園田正司 記録者： 西野十紀 発表者： 西野十紀

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション能力
2. 精神、身体領域を総合的に
3. 実習での評価

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

コミュニケーション能力 患者さんとの関わり方、相手に合わせた関わり方、状態に合わせた関わり

社会人としての常識、自分の評価ができる

精神領域と身体領域をどちらも評価できるように

学校で習ったことを実習で実際に観察して症状などを見て学んでもらいたい

学校で学んだことに加えて普段関らない方と関ることで危険予測などをできるように

感想

評価、技術よりも基本的な態度、コミュニケーション力などを学んでほしいと考えていることがわかりました。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 5 世話人氏名：内田智子

GW 司会者：佐藤清美 記録者：永武寛子 発表者：本多優作

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 全体像、その人らしさを考える
2. OTの役割を考える
3. やりがいを感じる

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・臨床でしかみられない、現場の雰囲気を見てほしい。
- ・学校で学んだ疾患の知識を、臨床と結びつける。
- ・対象者の疾患に加えて、既往歴・周囲の環境・人間性・家族との関わり、など幅広い視点で総合的にみてほしい。
- ・対象者の精神的フォローや家族との関わりも大切にしてほしい。
- ・技術よりも、患者さんとのコミュニケーション能力や社会性を向上させる。
- ・最低限のリスク管理能力。 ・自分の考えを伝える能力。
- ・職場内や、在宅、地域の中での、OTの役割・意味を理解して、視点を深める。
- ・OTが国や地域から何を求めているかを考える。
- ・実習段階(短期・長期)でも目標は変わるが、早期には目的意識を持ってほしい。
- ・「OTを選んでよかった」「OTのやりがい」を感じる。

感想

同じ職種を担う者として、実習指導において、共通認識を持っていることが分かった。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 6 世話人氏名：中村義博

GW 司会者：平川樹 記録者：宮崎光成 発表者：本田秀明

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者とのコミュニケーションスキルの確立
2. スタッフとのコミュニケーションスキルの確立
3. 社会人としての接遇を身に付ける

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

コミュニケーションがしっかりとれるか
患者・治療者関係がとれるか
患者やスタッフへ挨拶がしっかりとれるか
患者様への説明ができるか
急性期に必要な OT アプローチを知ってほしい
CCS の視点で、幅広く参加型で学んでほしい
いろいろな患者様との関わりを経験してほしい
作業療法は楽しいということを学んでほしい

感想

患者、スタッフとのコミュニケーションがしっかりとれること、作業療法を楽しみ思うことなど、学校の授業と臨床実習で、両輪となりながら、進めていきたい、という意見が多数であった。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 7 世話人氏名： 田中剛

GW 司会者： 本多麻梨奈 記録者： 山口萌 発表者： 道下貴志

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 社会人としての態度（挨拶、返事）
2. 对患者との経験（コミュニケーション、技術の習得、患者さんの変化）
3. 学校の学習の実践（知識の具体化、それぞれの分野を知る・経験する）

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・それぞれの分野を知ってもらう（偏見からの脱却）
- ・正しい知識に基づいた病態像の把握
- ・社会人としての基本的態度（挨拶や返事ができるなど）
- ・技術（ROM、MMTなどの検査など）
- ・患者とのコミュニケーション（話し方、情報の取り方など）
- ・さまざまな分野の作業療法を経験してほしい→とにかく作業療法に興味を
- ・教科書の知識を具体化
- ・患者の変化

感想

知識や技術面だけでなく社会人としての態度や作業療法の楽しさを知るといった面はやはり学校教育では養えないので学生のトータルの成長を促していけるよう多面的に指導していく必要を感じた。また、実際の臨床実習指導では知識・技術の不足に対し視点が向きやすい面があったが、実際に意見交換を行うと情意領域での不足を感じている面があり、指側としてそういった点でも総合的な医療者教育を行う必要があると感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 8 世話人氏名：牧山 美穂

GW 司会者：長田朋樹

記録者：中村勇輔

発表者：大久保篤史

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 経験
2. 知識
3. 情意領域

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・全体像の把握、問題点の抽出、プログラムの立案、実施等、全体の流れを経験することができる。
- ・人の役にたつということ、自分がどうすれば対象者を支援することができるか、こういう専門家になりたい等、最初の素直な気持ちを持つことができる。
- ・対象者との会話、コミュニケーションに慣れることができる。対象者の年齢層に合わせた対応ができる。
- ・学校では学べないこと（対象者への対応方法）を中心に学んでほしい。
- ・実際に対象者に触れる機会をなるべく多く作り、経験してほしい。
- ・笑顔で緊張せず、子どもと対面することができる。

感想

挨拶することができる等、まずは社会人としての基本を学ぶことが重要だと感じた。学校では学べないことを臨床実習で学ぶことが大切だと感じた。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 9 世話人氏名：末武達雄

GW 司会者：久保田智博 記録者：碓神奈 発表者：高橋弘樹

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 気づきけるような『人間力』
2. OTとしてのやりがい
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・受け身的な実習から主体的な実習になるように
- ・気づける学生になろう
- ・24時間患者様の生活を考えられるようになる
- ・OTとしてのやりがいや楽しさを伝えるように関わる。また、専門性を生かした臨床での考えや興味を持ってもらえるように

感想

OTとしての魅力や経験を机上以外で伝えることの重要性を感じました。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 10班 世話人氏名：村木 敏子

GW 司会者：折口 百合子

記録者：岩永真仁

発表者：渡部 賢治

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 社会性（コミュニケーション等）
2. 患者様の生活や心理面を含めた理解
3. OTが実施している一連の流れ（情報収集、理解、評価、実施）

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・ 職員患者様とのコミュニケーション取り方
- ・ 基本的な社会性（あいさつ、言葉遣い、態度）
- ・ 患者様の心理面や生活面を考える
- ・ 多（他）職種とのかかわり
- ・ 実際に接してもらって対象者の得意なこと苦手なことなどを知ってもらう
- ・ 数値の測定のみで評価が終わってしまう

→そこから何を知るか

→適切な評価項目を列挙する。

- ・ OTが実施している一連の流れ

感想

OTの専門性のもちろんだが、社会性を学ぶことが求められる。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 11 世話人氏名：塚本 倫央

GW 司会者：岡部 信子

記録者：溝口 千絵

発表者：橋爪 陽一

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. OT としての楽しさ
2. 臨床実習でしか学べない
3. 対象者像の理解

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・臨床実習でしか学べない流れを学んでほしい。
- ・OT としての楽しさを学んでほしい。
- ・現場に出て対象者や多職種者に対しての真剣さやひた向きさを感じてほしい。
- ・コミュニケーションの取り方（OT としての取り方、多職種とのコミュニケーション）
- ・情報収集のしかた。
- ・障害像だけでなく対象者の時代背景なども感じ取ってほしい。
- ・実習で自分が出来なかったことを感じて、「こうすればできそう」と思ってほしい。
- ・見学、模倣、実施を通して見る視点を増やしてほしい。

感想

学生の知識向上だけでなく臨床実習の現場では学べない社会人としての常識や楽しさを学んでほしいと現場の指導者は感じているのだと思った。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 12 世話人氏名： 中村和也

GW 司会者：坂井遥 記録者：馬場奏恵 発表者：上野和子

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. チーム医療
2. OTの楽しさ（何を学びたくて、何に興味を持っているかを引き出す）
3. OTの視点

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

- ・OTは楽しい職業（OTSがどういうところに興味を持っているのか、何を学びたいと思っ
- てきているのか）
- ・社会人としての最低限のスキル
 - ・患者様への説明
 - ・患者様が何をしたいかを引き出し方
 - ・応用力（ひとつの経験を次に生かす）
 - ・OTが関わることで対象の方に様々な影響がある
 - ・たくさんの職種（家族・本人含めて）と関わる職業である（チーム医療）
 - ・OTが対象者を見る視点
 - ・不安や悩みを口にできる環境づくり
 - ・病院だけでなく、生活に戻った後のOTのかかわり方

感想

学生の指導をすることで、人生にも応用できる。

MTDLPの視点で学生を指導していきたい。自分がOTとして楽しんでいることが大切。

報告書：演習1 一般目標と行動目標

グループ 13 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：林 未央理

記録者：中山 理恵

発表者：原口 学

学修目標

作業療法臨床実習をとりまく背景と臨床実習指導体制の変遷、作業療法教育における臨床実習の意義と目的、また作業療法臨床実習における到達目標、一般目標、行動目標について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. コミュニケーション
2. 多職種連携
3. 社会性

グループワークで議論された内容

<臨床実習で何を学んで欲しいと思っている点>

他部門との連携のために必要なコミュニケーションを身に着ける

患者様・ご家族関係を構築するためのコミュニケーション能力を身に着ける

患者様・家族のニーズを把握できる

評価をする前の患者様の全体像を把握できる

患者様に触れる前の声掛けの仕方に配慮できる

社会性を身に着ける

作業療法士の楽しみを感じる→モチベーションの向上

感想

様々な分野の視点からディスカッションができて勉強になりました。

また、目標を立てる難しさも感じました。

演習 2

基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 1 世話人氏名：福島浩満

GW 司会者：田縁麻衣子 記録者：中村早央里 発表者：松浦功嗣

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 安全・安心に実施ができる
2. 自身の振り返りができる
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・患者に対して安全に実施できる
- ・学生が安心して評価できる
- ・評価ポイントを正しく理解・実施できる
- ・セラピスト自身の振り返りになる

課題

- ・時間がとれない
- ・一つ一つの評価に時間がかかる
- ・プライバシーに関わることもある
- ・学生が緊張してしまう
- ・学生の自主性があまり発揮されない

感想

指導者・学生のそれぞれの立場で考えるいい機会になりました。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 2 世話人氏名：池田 朋代

GW 司会者：松尾 忠昭

記録者：山内 良太

発表者：大垣 充

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生ファーストにならないか
2. わかりやすいフィードバック
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・言葉に出すことで、フィードバックが可能（学生・バイザー・対象者）
- ・正・負のフィードバック両者を行うので、いい点・悪い点を同時に把握することができる。
- ・その場でフィードバックがあるので、内容はわかりやすい。

課題

- ・時間がかかってしまう。
- ・患者さんに重きを置くのではなく、学生に重きを置いた介入になる可能性がある。
- ・フィードバック中に患者さんに知られたくない情報を口にしてしまう可能性がある。
- ・患者さんが多いと、学生が混乱する可能性がある。（情報が多、時間がかかる）
- ・CCSの方法を自分自身（バイザー）や他スタッフが上手にできるか心配。

感想

学生に正・負のフィードバックをその場で行うので、学生はもちろん、バイザーや患者さん本人も現状を理解しやすいと感じました。しかし、時間がかかることや、学生に重きを置いてしまう可能性があるため、注意点や業務への工夫が必要だと感じました。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 3 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：山崎結城

記録者：秀島樹育

発表者：田川良枝

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 従来型と現在の指導方法
2. 丁寧な指導
3. 時間制約

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

従来型と比較すると説明が入り、手取り足取りの指導のためスムーズである。

コミュニケーションの取り方も学べて、患者さんの緊張感も緩和する

学生は質問がしやすい。

良い点をフィードバックするため、学生の自信につながりやすい

リスク面を説明するため、指導者も気を付けることが明確になる

学生が実施している間、指導者は他の角度から患者をみれるため、評価が深まる。

課題

見学・模倣を何回も実施するため、患者の負担が気になる

学用患者とならないように注意する

精神科では患者によって受け入れができない場合もある

業務時間の制限、指導者の力量の影響が大きい（逆に力量が上がるメリットにもなる）

レポートがないため、一連の流れを学ぶことがない少ないため、理解度が不明

感想

動画の内容は説明も丁寧で、見本としては非常にわかりやすい。しかし、実際の臨床で行うには課題も多いと思う

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 4 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW 司会者： 古川 拓弥 記録者： 園木 雄介 発表者： 園木 雄介

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 時間
2. 患者負担
3. 領域における汎用性

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

学生からすると指導者がその場で指導するため学びやすい（反復できて良い）
患者様側からもその場でフィードバックを受けてわかりやすい
指導者側も実施の際遠目で観察できて患者様の実施状況が確認できるので良い
学生の理解度を把握しやすい（会話も増える）
その場でフィードバックでき、すぐ解決できて良い（すぐ修正できる）

課題

時間がかかる（特に評価に見学模倣実施と3回するのが特に）
患者様側からは特に評価において見学模倣実施で3回も行うと負担が強い（ストレス）
患者様側は治療を重要視しているので評価を時間かけて何回も行うことは不利益
模倣を飛ばして実施を行うことがよいのではないか
複数の実習生に教える場合は模倣、実施はそれぞれ行う必要があるのか、あるならば負担が強いのではないか
見学、模倣、実施のプロセスを精神科領域や発達領域は実施しにくい

感想

状況によって見学、模倣、実施のプロセスを実施することが困難な場合があるのではないかと。しかし学生にとっては理解度を確認できるので実習としての価値は高くなると思われる。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 5班 世話人氏名：桑原 由喜

GW 司会者：矢島 由季 記録者：馬場 絵理 発表者：百武 大樹

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生のスキルアップには有効的
2. 臨床現場での時間の確保について
3. 理想と現実のギャップをどう埋めていくか課題となる

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

患者さんや学生も緊張しすぎない・時間をゆっくりとれるので理解度の確認が可能・患者さんと関わりつつ指導を受けることが出来る・学生だけでなく患者さん側からも説明があるから、安心感が得られる・指導のポイントもわかりやすく、患者の一連の流れを包括的に見ることが出来る（チーム医療としても）・間違ったやり方をしないで、正しい方法を得られる・ポイントを絞ってあげていると学生さんの理解力向上にも繋がる・声かけや患者さんへの説明の仕方を実際に見てモデルにしやすい・指導者側としてコーチングとティーチングを分けやすくなる

課題

見学/模倣/指導との時間がかかり、臨床の現場の中で時間を取ることが出来ない（説明も含め）・患者への負担がかかり、時間などの不利益がかかる・環境設定や説明時間の工夫がいる（その時点での学生の理解は不明）・指導者側のスキルが必要となる・指導者間の指導方法を統一する必要がある・指導内容のスケジュールや患者の振り分けなど必要になる・一人の患者さんや評価内容に時間をかけてしまうと他の患者さんや内容に影響してしまう

感想

理想として、見学/模倣/実施と時間をかけて行うことで学生だけでなく、患者さんやバイザーにもメリットがあると思います。しかし現実には単位数、時間のなさ等課題も多いので、理想と現実のギャップをどう埋めていくか今後も考えていくべき課題だと思います。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 6 世話人氏名： 内田智子

GW 司会者： 山重佳 記録者： 池田龍広 発表者： 原田洋平

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生や患者が安心して取り組める
2. 具体的な関わりの中で即時に学べる
3. 学生や指導者によって内容が左右される可能性がある

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

事前にポイントを押さえていると学生が安心できる
患者も安心できる
すぐにフィードバックができ、学生がわからない点をすぐに学べる
実際に関わることで具体的に学べる
リスクの確認がしやすい

課題

学生に教える時間やフィードバックする時間の確保が難しい
段階的に教えていくのが難しい
ポイントを押さえるのが難しい
参加型実習に限らないかもしれないが、学生や指導者によって教える内容が左右する可能性がある
わからないことを、安易に、教えてもらえると思う可能性がある

感想

参加型実習では学生側へのメリットはあるように思われるが、学生や指導者によって内容が左右される可能性があるのが難しいと感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 7 世話人氏名： 中村義博

GW 司会者： 道下貴志 記録者： 本多麻梨奈 発表者： 松尾隆太

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解度に沿って進めることが可能
2. 指導の時間が十分に取れないのでは
3. 学生の主体性が損なわれる可能性もある

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット（共：指導者、学生に共通 学：学生 指：指導者）

- ・学生の理解度をその場で確認しながら進めることができる。（共）
- ・ポイントを絞ってすぐにフィードバックがもらえることで理解度が高まる。（共）
- ・既存の流れ（評価、目標設定、実施）よりもプレッシャーが軽減したのでは。（学）
- ・部分的な介入が可能になったことで患者さんへの負担が少なくなり選定しやすくなった。（指）
- ・実践能力がつく。

課題

- ・日々の業務に加え、一人の学生に対して確認やフィードバックに十分な時間を確保できる余裕がない。
- ・その場で指導が入ることで患者さんとの関係性なども配慮しながら進めないといけない難しさもある。
- ・精神科領域においては個別での活動より集団活動が多いので CCS で実施するのは難しい。
- ・部分的な介入となることで、PDCA による一連の流れが理解できない可能性がある。
- ・学生の主体性が損なわれるのではないか。
- ・高次脳機能障害の評価は同患者さんに繰り返し実施することはできないのでどうしたらいいか？

感想

作業療法参加型実習となったことで指導者・学生両方にとってメリットがある反面、時間の確保や患者さんの不利益、学生の自主性など課題も多く挙がった。患者さんの状況や学生の能力などに合わせた指導者側の臨機応変な対応が必要になってくるのではと感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 8 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：柴田麻真理

記録者：長田朋樹

発表者：峯菜緒

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生と患者が安心して取り組める。
2. 学生や指導者によって内容が左右される。
3. 指導者側の負担が多い。

グループワークで議論された内容

＜「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題＞

メリット

- ・同じことを繰り返し行って、毎回フィードバックもあるため、理解が深まる。
- ・学生の達成度を確認することなどで、知識と理解度がわかりやすい。
- ・注意するポイントや視点を伝えることでその場で学習できる。
- ・指導者側も要点を絞って教えるので、学生側も注意するポイントがわかりやすい。指導に無駄がない。
- ・よかった点を伝えるので学生のモチベーションが上がり、学生と指導者の信頼関係にもつながる。
- ・事前にやることがわかっているため、学生のプレッシャーが少ない。

課題

- ・事前の確認とフィードバックなどで時間がかかる。患者が繰り返し行うため負担が多い。
- ・患者さんの理解が必要であり、患者への説明がセラピストの説明する能力が必要。
- ・ティーチング寄りの指導になり、学生の意見が反映されにくい。

感想

学生にとってのメリットが多く、指導者側の負担が多く感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 9 世話人氏名： 牧山美穂

GW 司会者： 碓神奈 記録者： 高橋弘樹 発表者： 出口純平

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 説明が丁寧
2. 時間がかかる
3. 対象に限られる

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・丁寧で学生だけでなく患者にも伝わりやすい
- ・学生だけでなく患者へもフィードバックをできている
- ・何を実施するかが明確で学生が理解しやすい
- ・自己評価を促していて、学生と指導者で意見を共有できる

課題

- ・時間が足りない
- ・反復した評価には患者の理解が必要
- ・対象となる患者に制限がある

感想

指導にかかわる時間はどの施設も苦勞しているようだった。学生の自主性や患者の安全性などほかの意見が聞かれた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 10 班 世話人氏名： 末武達雄

GW 司会者：内田美代子 記録者：谷村祐香 発表者：坂口春香

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 丁寧な説明や実際場面をみることで学生の理解につながりやすい。
2. リアルタイムなので学生、指導者ともにできたことや課題の確認が行いやすい
3. 複数行うことでの患者さんへの負担や業務内で指導の時間をいかに確保するのかが課題

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・丁寧に説明できるので、学生は理解しやすい
- ・実際にみることができる。
- ・その場ですぐに指導でき、間違いに気づきやすい
- ・学生のフィードバックを行うことで患者さんの理解にもつながる
- ・学生の意見をその場で聞くことができ、学生や指導者がリアルタイムに確認ができる

課題

- ・何回も実施するため患者さんの負担は大きい
- ・声かけの仕方次第では学生が受け身的になりすぎる。
- ・見学、模倣、実施を行う業務時間内に行う際に時間を要する。
(実際の業務時間内にいかに時間を確保するのか)
- ・ROM 測定を一か所測定するのに 2 回は必要となる。
- ・患者さんの前で動画のように説明する時間をとることができない
- ・スタッフの手技や思考過程の言語化をできるようにならないといけない

感想

リアルタイムでの丁寧な説明を行うことでお互いの理解は得やすいと思う。
事前の説明や実施後の確認も含め業務の中で時間の確保が課題と感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 11 世話人氏名：村木 敏子

GW 司会者：前川 俊太

記録者：小出 将志

発表者：北川 智恵

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の自主性
2. 基本のイメージ
3. 時間管理

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・複数の方を経験できるため、経験値が高まる。
- ・見学、模倣、実施を経験することで段階的に理解しやすい。
- ・都度フィードバックされるため学生も質問しやすい。
- ・基本をイメージしやすく、その場で解決しやすい。
- ・学生の考えや行動を把握しやすい。

課題

- ・学生の能力によっては、次へ進むタイミングの判断が難しい。
- ・学生によっては、治療時間がかかる。
- ・学生の考える機会を減らしてしまうのではないか。
- ・患者さんの不利益になるのではないか。
- ・学生の自主性を損なう結果になるのではないか。

感想

学生に対する説明や反復した内容を患者さんに実施することに対しての不利益をどう考えるか、解決方法についての共有が必要ではないかと感じた。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 12 世話人氏名： 塚本倫央

GW 司会者： 上野和子 記録者： 坂井 遥 発表者： 城戸 よしみ

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生にとっては丁寧な指導を受けることができ、基本的な知識を確認できる
2. OTS が考える機会が減り、意見を引き出すことが難しい
3. バイザーの力量でばらつきが出るので、職場での理解が必要

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

学生とバイザー、双方向からの意見交換ができる
少し離れた場所からのバイザーが評価できるなど、臨機応変に対応しやすい。
学生は丁寧に指導してもらえる（基本的な知識を確認できる）
患者様への評価をバイザー自身が確認できる
患者様にとっては OTS と二人きりになるよりは安心感がある。

課題

職場での理解が必要。
バイザーの力量でばらつきが出る（学生に合わせて、時間や目標の調整が必要）
バイザーは時間が十分にとれない
患者様の時間的・身体的・精神的な負担が大きい
OTS が考える機会が減る、OTS の意見を引き出すことが難しい（先に目標やポイントを伝えるため）

感想

学生にとって安心感は得られるかもしれないが、学生自身も考える機会が減ってしまうことへの不安はあるかもしれない。いかに意見を引き出し、時間を有効に活用してもらえるか、バイザー、職場が勉強していくことが必要だと感じる。

報告書：演習 2 基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の見学・模倣・実施の実践

グループ 13 世話人氏名： 中村 和也

GW 司会者： 中山 理恵 記録者：原口 学 発表者：牟田 沙織

学修目標

作業療法参加型実習について、その指導形態、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の習得のための、見学-模倣-実施の指導ポイントおよびコーチング・ティーチングを活用した効果的な指導方法について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の不安軽減になる
2. その都度フィードバックができる
- 3.

グループワークで議論された内容

<「作業療法参加型実習」を実際に行っていく上で考えられるメリットと課題>

メリット

- ・学生からの発言が多くて、身に付きやすい
- ・学生の不安軽減につながる
- ・リスクを説明しているので、患者自身の不安軽減ができる
- ・まとめてではなく、即時にフィードバックができて業務時間が短縮できる
- ・事前説明し、フィードバックが評価ごとにできる

課題

- ・一つの測定を見学・模倣・実践と何度もすると患者にとって時間が無駄ではないか
- ・学生に時間をかけることができない
- ・評価・訓練を一緒にできない
- ・リスクがある患者に対しても実践をするのか

感想

その都度フィードバックをすることで、学生にとって不安軽減につながるのではないかと思います。しかし、ひとつひとつに時間を要し、業務内に難しいように感じた。

演習 3

ハラスメント防止

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 1 世話人氏名： 中村和也

GW 司会者： 千北 晃 記録者：宮崎祐一 発表者： 下濱太陽

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. ハラスメントの知識
2. 相談窓口
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・ハラスメント知識の共有、例を挙げる
- ・セクハラ対策としては、実技は基本同性で対応する。身体的接触が見込まれる場合など
- ・パワハラ対策としては、具体的な例を皆で共有する
- ・学生は学校に相談しやすい関係であるべき
- ・学校でもハラスメントの具体例を教える

感想

何気ない会話、行動がハラスメントに繋がると考えさせられました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 2 世話人氏名： 牧野 航

GW 司会者：吉村克己 記録者：大垣充 発表者：池田佳宏

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 個人差
2. 意識改革
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

学生が患者様から受けている場合、バイザーが学生を呼ぶ（遠くから読んで逃げる口実を作る）

飲み会でなく食事会（昼食会）にする

委員会を設立し意識改革・研修会を定期的に行う

マタハラに対してマニュアル作成

相談窓口の明確化

発生時当事者への厳罰化

感想

個人によってとらえ方が変わってくる。一番の対策は研修会等の開催で意識改革を促していくことだと思います。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 3 世話人氏名：池田朋代

GW 司会者：福島夏希 記録者：鶴智美 発表者：山崎結城

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 環境作り
2. 複数でのかかわり
3. ハラスメントについての話し合いの場

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・はじめから疑われないような環境作りをする。(二人にならない個室にこもらないなど)
- ・体が触れるような練習や指導は同性同士で行う。
- ・性別、年齢などを考慮し複数で指導チームをつくる。
- ・飲み会ではなく院内でのランチ会に変える。(バイザーの負担なども考慮)
- ・学生に嫌な思いをしていないか聞くなどの配慮。(先生から聞いてもらうなど学校側にも協力してもらう)
- ・学生だけの個室を準備する。(学生も休憩や息抜きをすることができる)
- ・部署内でハラスメントについての情報共有や話し合いをする。

感想

相手を不快にするような言動に注意する、逆に自分が訴えられたりしないよう自分の身は自分で守ることが必要だと感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 4 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者： 御手洗 令美 記録者： 森 祐花 発表者： 森 祐花

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学校に確認
2. 異性に対する対応
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ①実習指導で身体接触がある場合→本人の意思を確認する。関係性を築く。オリエンテーションの時点で説明し学生の意思や同意を得る。第三者も介入する。
- ②実習時間外 5 時間の解釈→学校に相談。時間内に返せるようにする。本人の自主性に任せる
- ③学生が体調不良になった際の対応→病院で受診等させ回復させ自分で帰ってもらう
- ④LGBTの対応→各病院で対応マニュアルを作成する。
- ⑤通勤してくる学生の服装が派手で指導の必要な場合はどうか →
- ⑥リハビリ室等の整理・整頓・掃除を学生に率先してするように指導するのはどうか
→みんなで掃除する

感想

ハラスメントは対応が難しいと思います。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 5 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：永武寛子 記録者：塩田聖子 発表者：中山浩介

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 事前の確認・準備が必要
2. 相談ルート・窓口の明確化
3. 養成校・実習施設・学生での情報共有

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- 1, プライベートな事について聞き過ぎない。
- 2, 事前にセクハラ・パワハラについて職員で勉強会を実施、啓発活動。
- 3, 飲み会は学生の同意を得る、お疲れ様会をしない
- 4, セクハラする患者様には同性同志にする、そういう患者さんを担当にしない、
学生がバイザーに伝えやすい環境を作る
- 5, 学生に休日の人員要請の強要をしない、もしくは同意を得る（スポーツ大会など）
- 6, 県士会の倫理委員会の相談窓口へ連絡
- 7, オリエンテーションでハラスメントに対するルート作りを再確認
- 8, バイザー会議での学生との情報共有（病院の規定・規則の説明）理由など

感想

気をつけてはいるが、相手のとらえ方次第でセクハラ・パワハラになることも多くあることに気付いた。事前の確認や情報共有の場が特に必要であると感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 6 世話人氏名：栗原由喜

GW 司会者：中野麻里 記録者：平川樹 発表者：宮崎光成

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場면을想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. ハラスメントに関する院内研修やマニュアル作成を行う
2. 業務後の活動への参加は本人の意向を確認する
3. 学生への指導は、時間内に済ませる

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

ハラスメントに関する研修を院内で実施した

指導者、統括指導者間でハラスメントに関する院内方針に関する確認を毎年行っている

院内マニュアルを作成した

指導者を守るための規則作りも必要

時間内で実施できた部分までで学生の評価を行う、基本的に時間内に済ませる

身体に触れる関わりがやむを得ず必要な際は、基本的に同性が行う

歓迎会や送迎会等の業務後の活動参加は「どうする？」と本人の意向を聞く

個人間での連絡先交換は基本的にしない。やむを得ず連絡先交換をした際は、学生、指導者とも実習最終日に連絡先を消去する。緊急時の連絡先は学校を通して確認する

異性で2人にならないよう、複数職員で対応

感想

ハラスメントは相手の取り方による部分も大きく、難しい問題と感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 7 世話人氏名： 内田智子

GW 司会者： 松尾隆太

記録者： 道下貴志

発表者： 出田康紘

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 受け取り側と関わる側の相違
2. 周囲への協力
3. 客観的な視点の必要性

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・口頭で質問がなかった学生に対し、デイリーノート等で質問を促す。また、学校側へも相談し協力を促す
- ・学生指導に当たっている指導者に対しても先輩や上司から関わり方の助言を行う
- ・学生への関わりの中でハラスメントが発生しないよう、スタッフ間での情報交換（客観的な視点）も行う
- ・できるだけ性別や年齢が近いスタッフから指導を行ってもらう
- ・相手の反応次第で極端な関わり方の変化をつけないようにする
- ・必要以上の身体への接触は避ける
- ・他の学生との比較は行わない

感想

相手側の受け取り方次第で様々なハラスメントが発生してしまうことがあるため、例え善意で行う事項であっても相手側の反応や受け取り方の考慮が必要であることを感じた。また、自分たちだけでなく周囲（学校含む）への協力も行う必要があると理解した。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 8 世話人氏名： 中村義博

GW 司会者： 中村勇輔 記録者： 峰菜緒 発表者： 有永真太郎

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 職員のハラスメント対策の共有
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・FBの時間を決める。バイザーの時間も配慮。
- ・ポスターを掲示する
- ・飲み会をしないと統一する。昼のランチ会。
- ・5時間までという課題時間の認識を共有
- ・学生と職員の開始時間の統一。掃除等学生だけで行わず、一緒に行く。
- ・スタッフ室に学生席を設けることで学生同士の揉め事が起きないように確認。実習以外（環境、学生同士の関わり等）での管理を心がける
- ・容姿について言わない

感想

対応に差が出ないように統一することが必要であると感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 9 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：高橋弘樹 記録者：出口純平 発表者：加藤友里夏

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. ハラスメントの対策
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・相談窓口の設置
- ・言わない、触れない、誘わない
同性のスタッフで実技指導を行う
- ・実技指導を行う際は触って良いか同意を取る
- ・ポスター提示
- ・密室になるような個室には2人で入らない。
- ・対策の部署を作る。
- ・院内の勉強会の開催。

感想

ハラスメントの境界の理解が難しい。また、指導者側と実習生側どちらも守るようなシステム作りが必要だと感じた。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 10班 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：岩永真仁 記録者：坂口春香 発表者：本田拓也

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 指導とハラスメントの境界線
2. 活動に対しての誘い方の工夫
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・身体に触れるような動作は同性のスタッフで行うようにする
- ・フィードバックは、個室ではなく、人の目があるところで行うようにしている
- ・事前の告知と同意があればいいのか
- ・第3者に近くで見守ってもらう
- ・入浴、更衣などの日常生活動作は、同性の患者の見学を行うようにする
- ・教育機関と協力する
- ・学生が話しやすい同性のスタッフを設ける。
- ・学生に何かあったら話すように事前に伝える
- ・実習の歓送迎会をなくしたり、院内の昼食でお疲れ様会を行うようにした

感想

どのことに対して学生がハラスメントと受けとるかどうかの境界線が難しいと感じた。対応策を今後しっかりと考えていかなければと思った。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 11 世話人氏名：末武達雄

GW 司会者：溝口千絵 記録者：田中まなみ 発表者：岡部信子

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 時間内での終了
2. 強要しない
3. 環境などにも配慮する

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・ 時間外の勉強会や食事の参加
→ 時間内の勉強会のみ参加してもらう。
学生に選んでもらい、実習の評定には関係ないことも伝える。
- ・ 時間外のフィードバック
→ 時間内で終わるように振り返りの時間をとる。
- ・ 異性の学生の場合のフィードバックの場所
→ 極力二人きりにならないようにする。
プライベートな話も周りの目はあるが聞こえないように離れた場所で行う。
- ・ プライベートなことをあまり聞かないようにする。

感想

自分たちが学生だった時は当たり前だったことでもハラスメントに該当することが多々あるため、指導者もしっかりと勉強して対応することが重要だと感じました。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 12 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：城戸よしみ

記録者：馬場奏恵

発表者：榊原淳

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生が指導担当者以外でも相談できる相手を作る（窓口作り）
2. 学生指導マニュアルの作成（ハラスメント含め）
3. 実習先と学校側との情報共有

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・同性のバイザーが担当する（体に触れるような指導を行う場合のみ、同性でも対応）
- ・事前に異性のバイザーでいいかどうかを確認する（バイザーと学校側が前もって相談していく）
- ・指導は第三者がいる環境で行う
- ・何かあった場合にすぐに相談できる環境を作る（別の責任者、相談窓口を教える）
- ・指導のマニュアル（ハラスメント）を作成する

感想

実習先の意識改革がもっとも大事だと思う。実際の事例を通して、みんなで「これはどうなのか」一緒に考えることが重要だと感じた。また、事前に学校側と実習先が注意点などの共有ができれば、ハラスメントの問題は減ると考えられる。

報告書：演習3 ハラスメント防止

グループ 13 世話人氏名：塚本 倫央

GW 司会者：原口学 記録者：牟田沙織 発表者：藤永勇希

学修目標

作業療法臨床実習における臨床実習施設と養成校の連携した指導体制、対象者の権利保障・安全性の確保のためのリスク管理、個人情報保護について理解する、また学生の適正な指導のためのハラスメント防止について、指導場面を想定し、その対応を学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. ハラスメント防止マニュアルを作成し、対応の統一を図る
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<臨床実習におけるハラスメント防止対策案>

- ・個室での指導は行わず、複数で部屋に入るかドアを開けたままにしておく
- ・定時での実習終了
- ・患者さんと二人にしない、近づかせないように配慮する
- ・バイザーのシフトに合わせて出勤させる
- ・40/wの基準時間厳守
- ・実習指導の残業上限を決める(30分)
- ・歓迎会などへの誘い方に気を付ける(楽しみにしている学生もいる)
- ・飲み会参加時の帰宅時間の設定(1次会で帰すなど)
- ・個人情報を聞かない
- ・ハラスメント防止マニュアルの作成(全体での統一を図る)

感想

受け手側（学生）次第でどのような場面もハラスメントになり得るのでハラスメント防止マニュアルを作成し、職員側の身を守ることも大切であると感じた。

演習 4

臨床実習における学生評価

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 1 世話人氏名： 塚本倫央

GW 司会者：木山絵理 記録者：踊瀬脩大 発表者：田縁麻衣子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 接遇・コミュニケーション
2. ポジティブ変化
3. 体調管理

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・評価から実施までの一連の流れが理解できたか。
- ・患者様、職員も含めてコミュニケーションが図れるか。
- ・実習開始時と終了時の学生のポジティブな変化。
- ・積極性、実習時の態度。周囲を見れているか。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・体調管理に努める。・挨拶。（例：自己紹介の練習）
- ・対象疾患に対する事前学習、事前準備（評価用紙、評価器具）。・気合、根性。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・消極的、萎縮的な学生→SV・CV への相談、セラピスト自身も周囲へ相談（自身の態度がどのように見えているか）、養成校（学生と先生と面談）への相談し最後まで実習が行えた。
- ・実習地の連休が続き、連休後学生が来なくなってしまった。連休が続き、行きたくなくなってしまった学生（遊んでおりレポートを作成していなかった）。連絡も取れない。
→学校側との連携、親御様への協力依頼、実習は継続できた。

感想

学生一人一人違うのでその人にあった対応が大切。問題等が生じた時は一人で考えるのではなく上司や学校との連携を取る事が大切だと感じた。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 2 世話人氏名：中村和也

GW 司会者：杉村彰悟

記録者：松尾忠昭

発表者：中山真一

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 実習を通して自分自身がどう変化したか
2. 態度面だけでなく知識面も大事
3. 学校や上司に相談する

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

何か変化点があれば「挨拶」「対象者の変化」そこに重きを置いている

基礎的な技術。解釈、臨床志向。接し方、態度の3視点。

患者さん、利用者さんへ向き合える社会性、マナー。苦手なところをどう自分自身で向上させることができたか。どういった OT になりたいか、やる気があるか。実習を通してどこが変化したか自身で言えるかどうか。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

基本的な知識（ROM など）。担当してもらいたい患者の疾患について。解剖・運動・生理学の復習。仕事に対する積極性、心の準備。前回の実習で指摘された所、弱点などが自分であればそこを重点的に実習に備えてほしい。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

全く話をしない学生→学院に連絡、指導者と面談し涙を流す。そういう性格なので変えようと努力したができなかった。学校に相談し一時学校に戻る。レポートは全てコピーをして提出した。最終的には自分の言葉で書き直した。フィードバックも定時までにして帰宅させたが、前日と同じ内容のレポートを提出した。上司に相談し、学生に話をしてもらおうと少しずつ改善した。

感想

学生の変化を見つける必要があると感じた。学生には社会性や主体性が必要だと思うが知識面も勉強してほしい。学生に問題が生じた場合は学校や上司にすぐに相談が必要だと感じた。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 3 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：日南 雅明 記録者：川崎めぐみ 発表者：福島夏希

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 技術面より人間性
2. やる気
3. 素直

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・やる気にベースをおいている
- ・アドバイスを理解しようとしているか（自分で調べたりといった行動がみえる、デイリー）
- ・患者様のコミュニケーションやその患者様のことを知ろうとしているのか
- ・自主性や興味があることを示して（質問して）くれると指導しやすい
- ・言われていることを身につけているか（意欲・自主性・素直）
- ・伸び幅と到達ラインの双方をみる
- ・個別と集団でどう能力を発揮するか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面

- ・やる気、
- ・接遇（身だしなみ、化粧など）
- ・生活管理、体調管理

知識

- ・評価項目を勉強してきてほしい（学校と学生の認識に差がないように）
- ・評価用紙などの準備
- ・実習施設の概要（一日のスケジュール）

技術面

- ・実技の練習

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・リアクションがなく、分かったのか分からなかったのかが分からない学生
→毎週、学校の先生と電話連絡で相談をしながら取り組んだ
- ・居眠り（学力が低いことを言い訳にして、行動につながらない）
→学校の先生と面談をした
- ・患者様とコミュニケーションをとろうとしない
→学校に相談をした
- ・やる気はあるが、身体と心がついていけない学生。自信がない。
→自信をつけるような声かけ・関わり
- ・元々精神科に通っていた学生
→学校の先生に相談をする。ゴール設定を低めに設定した

感想

評価用紙に知識・技術について書いてしまいがちだが、指導者が本当に大事にしていることは、やる気や人間性などを重視している。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 4 世話人氏名： 池田朋代

GW 司会者：内山雄介 記録者： 里優 発表者： 里優

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 基本的態度
2. 事前学習
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・基本的態度（指導者だけでなく他のスタッフの意見も参考に）
- ・自主性、主体性・コミュニケーション能力（スタッフや患者様との関わり）
- ・一緒に働ける子かどうか（知識より素直に受け入れるか、成長できるかなど）
- ・意欲的に取り組む姿勢（出来の良さではなく学びたい・目標をもって取り組んでいる）

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面 ・挨拶 ・予防接種（患者様への配慮、自己管理） ・言葉遣い

- ・体調面や持病、服薬状況（副作用：眠気など）を実習地へ伝えておくこと

知識面・技術面 ・初日に評価に関する試験を実施（学生自身が現状を知るため）実習前に範囲を教える→事前学習は学生の自由

- ・最低限の手技を予習してきてほしい

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

フィードバックで訂正しすぎて、またはタメ口を注意して号泣→学生と話をする

親が迎えに来ているので帰ります→フィードバックせずに返した

高機能自閉症的な子が予定の変更に動揺して休んだ→学校・親に連絡

SNS 問題（学生間でのやりとり）→よくないよと注意

学生が頑張りすぎて睡眠時間を確保できていなかった→業務中に課題をしてもらった

感想

社会人として基本的態度が大事。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 5 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：馬場絵理

記録者：佐藤清美

発表者：永武寛子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 情意・知識・技術の評価
2. 問題点の対処方法
3. 学生に求めるもの

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

課題の振り返り。全体像。評価を統合し支援に反映できるか。コミュニケーション。人との関わり。最低限の社会性。積極性。気の利かせ方。優先順位。言葉遣い。空気を読む力、社会人としての立ち振る舞い（情意面）。人の変化に気づけるか。成長過程。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度：せめて挨拶、言葉遣い、コミュニケーション

知識：疾患のこと、到達目標・実習の目的（実習生の成績表）、実習直前にテスト実施

技術：評価方法・手技（学内レベルで良い。代表的なもの）、実習前・後のグループワーク

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

患者を転倒→「実習中止か？」と確認、提出物を出さずに言訳、両親が熱心で本人は意欲なし、居眠り（周りに心配させる）、実習に影響する持病あり（感情失禁、過呼吸。コミュ障害）、実習中にバイト（報告、相談なし）。

【対策】個別対応（休憩させる）、複数で実習、家での課題を減らす、養成校に連絡・相談、上司に報告、情報共有、難易度を下げる、リスクの説明。

感想

多くの実習指導者が情意領域に重きを置いていた。情意領域が成長すれば、認知・精神運動領域も自ずと伸びていく。指導者は日々研鑽し、その姿を見せることが大切である。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 6 世話人氏名： 鎌田秀一

GW 司会者：本田秀明 記録者：原田洋平 発表者：山重 佳

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生を評価する際は「目配り、気配り、心配り」
2. 主に態度面を実習に行くまでに学生に備えてほしい
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

患者や職員とのコミュニケーション、社会性、責任感

OT になりたいという思い

目配り、気配り、心配り

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

言葉遣い、礼儀、身だしなみ、体調自己管理

実習先に必要な最低限度の基礎知識・技術

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

報告・連絡・相談ができない学生；その場でその都度、個別に伝えた

レポートを作成しない学生；本人と話し合いながら、実習目標を修正した

職場のルールが守れない学生；職場での対応が困難な場合は学校と相談した

体調不良や無断欠席が続いた学生；医療機関受診勧奨した

感想

職場内での情報共有に加え、学校と報告・連絡・相談しながら対応することが大切と思われた。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 7 世話人氏名：栗原 由喜

GW 司会者：出田 康紘 記録者：松尾 隆太 発表者：栗栖 理恵

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生本人の達成度と変化点、OT としての積極性などに重きを置く。
2. 知識・技術の学習はもちろん、態度面での備えを期待している。
3. 様々な特性を持った学生が増加し、チームや学校と連携した対応が求められている。

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- それぞれの分野のやりがいを感じてほしい。
- 学生の長所・短所を把握し、実習中に得てほしい。また、頑張りたいことが達成できたいか。
- 促しがなくても、患者さんと積極的にコミュニケーションが取れたり、積極的に質問ができる。開始・終了時の変化点。
- 自分のできているところ、できていないことを把握し、できることが増える。
- 学生と面接し目標を設定する。実習開始時と終了時に「作業療法」の価値観を尋ねる。
- 身だしなみや挨拶など基本的態度、積極性・意欲などに重きを置いている。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- 態度・態度面は実習が開始するまで見えない部分が多い。事例を通して学内で学習してほしい。
 - ・ケーシーを1週間洗濯していない学生もいた。早く帰りたいという思いでフィードバックを催促する学生も。→部活やアルバイトなど社会経験が少なく、社会経験を積んでほしい（学外のボランティアなど）
 - 知識、技術 ・各実習目的の知識や技術（評価など）の学習・復習。
- ※いつも備えることを伝えようと思うが、漠然としている。

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- 洗濯しない学生→確認を行い、感染対策や自らの実践方法などを伝えた。改善された。
- 帰りたい学生→その際 SV 不在。周囲は啞然。その後 SV に伝え直接注意を行った。
 - 積極性を指摘され、最終日に症例でもない患者さんに「やらせてほしい」と希望した。
- バイザーより年上、発達障害疑い。OT になりたい動機も不明。プライド高い。フィードバックに聞く耳を持たず。→同性のバイザーに変わってもらった。
- 指導しても変わらない学生→器質的な問題を抱えている学生などが最近多い印象…。早めに学校に相談する。
- 距離感がつかめない・距離が近い学生→その都度説明。
- レポート提出を求めると、体調不良で休む。

感想

グループワークや他班の報告を聞き、学生評価や備えてほしいこと、様々な特性を持つ学生とその対応など、今までなかった視点や具体策を今後の実習指導に活かしたい。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 8 世話人氏名：内田智子

GW 司会者：大久保 篤史 記録者：柴田真理 発表者：長田朋樹

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 情意領域に関すること
2. 積極性
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・患者との関わり方。（コミュニケーション取れるか、その変化。関係性が取れるか）
- ・社会人としての最低限のマナーが出来ているか。（挨拶、時間管理、人間性、第一印象）
- ・自分から、変わろうと前向きな姿勢で学ぼうとしているか。やる気がある。
- ・対象者の行動や変化に気づいて動くことができる。・基本的な技能、知識

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

<態度面>

- ・身だしなみ。体調、体力、メンタル面（事前に情報欲しい）。積極的な態度

<知識面>

- ・全体像を捉えられること。・疾患の基本的な特性。基本的な医学知識

<技術面>

- ・確実に行う評価（ROM、MMT など）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・化粧が濃い学生。病院の基準に沿って女性職員から指導。その後来なくなった。
- ・ピアスをしている。病院で禁止と伝えたとこ、取り忘れだった。
- ・月曜日は毎週体調を崩す。学校に相談して対応をしてもらった。（バイザーが休みの日、提出日に休む。）
- ・一人で患者対応をしてしまう。

感想

知識や技術面よりも学生の態度ややる気に重きをおくと考える意見が多かった。実習に対しての基礎的な体調、体力、メンタル面と基本的な医学知識など、意見は少なく感じた。色々な学生に対応していくことが必要になっていると感じた。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 9 世話人氏名：中村 義博

GW 司会者：出口 純平 記録者：加藤 友里夏 発表者：田中 正人

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 社会性
2. 態度・礼節
3. 元気

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

社会性 挨拶 患者さんの立場を考えられる 課題に対しての成果

探求心や追及心 患者さんのことを考えているか 制度面の理解

治療の一連の流れ

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

体調を整える 院内(他スタッフ)で見られているという自覚

臨機応変に対応できるように、いくつかの場面を想定しておく

基礎的な技術の習得失敗体験を経験する

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

・居眠りをしていた・忘れ物をした・病院の多職種とトラブルを起こし、指導したが改善が見られなかった・助言中に黙り込む、泣く ・障害(発達障害)をもった学生の場合

<対応>

- ・顔を洗ってくるように指導した
- ・学校に相談した。最後は実習停止になった。
- ・時間をおいて再チャレンジ
- ・部門内での情報共有 スキルを教える

感想

健康管理や生活リズムは、事前に整えていてほしい。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 10 班 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：渡部賢治 記録者：折口百合子 発表者：谷村裕香

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 技術面よりも態度（意欲、積極性など）
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

中間評価の結果（エピソードも確認）、指導者と学生間のギャップの確認

意欲、態度（指導されたところの修正ができているか）、技術よりも社会的態度、意欲
一週間毎の行動目標を立てて、目標に対して頑張れたかどうか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面：挨拶、言葉遣い、身だしなみ、時間を守る、目標を1つでも立ててくる

知識面：測定の基本、疾患の基本的な症状、リスク（禁忌肢位など）、ICF、MTDLP

技術面：測定の基本、記録の書き方、メモを短的に書く

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・初日に「OT になりたくない、介護士になりたい」と言われた。
→初日に学校へ電話し対応してもらい、実習地では見学と面接を繰り返した。
- ・潔癖症で触れない→業務として必要な事を説明し、清潔感がある方から段階的に担当。
- ・自身で調べないと気が済まない、結果睡眠不足→就寝時間を決める、資料のコピー利用。
- ・実習中に寝てしまう→早く寝てもらい、短時間で終わるような課題を出す。

感想

学生の個人差も大きく、実習の目的の達成度で評価してよいのか悩む。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 11 世話人氏名：牧山美穂

GW 司会者：小出将志 記録者：橋爪陽一 発表者：前川俊也

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 意欲、向上心
2. コミュニケーション力
3. 養成校との連携

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

意欲や向上心、コミュニケーション能力、患者さんにどれだけ興味をもっているか、患者さんへの真摯さ、ひたむきさ、学生が主体的に動けるようになったか、自発性や向上心。

指導していく内容をどれだけ理解しているか、学んだことをどれだけ活かせるか。

報告連絡相談がどれだけできているか。臨床でしか学べないことを学びに来ている。

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

（態度面）学ぼうとする姿勢、心構え、覚悟。無断欠席、遅刻をしないなど最低限のマナー。苦手だなと思ったところを克服しようとする意欲を持つ。言葉使い、礼儀を見直してきてもらう。（知識面）MTDLP の知識、ICF の理解。多い疾患の最低限の知識を勉強してきて欲しい。基本的な疾患の理解。実習前に、今まで学校で学んできたことの復習をしてもらう

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

来なくなる学生がいた→実習が終了になり、学校に問い合わせたら学校に来ていた。実習がなかなか進まない、毎日同じことの繰り返しになる→学校に相談して到達目標を下げた。

実習がいっぱいだったのに本人がどうしてもレポートを作りたいと言ったがその後レポートが送ってこなかった→学校に問うと学校を休校して完成させられずに次の実習に出てた。

終始、淡々とした学生がいた。気持ちが伝わってこない、こなしている感が強い。

長期実習ではあったが、評価のところで進まず

メモしているけど忘れる

学生の家族だけが病院に来て、お礼の品物を持ってきた。

感想

現場でも実習生に関する色んな問題が起きているので、養成校の教員との連絡を密にして情報を共有しうまく解決していくことが重要であると感じた。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 1 2 世話人氏名：末武達雄

GW 司会者：榊原淳、平野優貴 記録者：坂井遥 発表者：平野優貴、東原太一郎

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 評価をする際は、本人の目標や基準を知る
2. 事前に実習に対する目標を学校、学生、実習先が共有する
3. 学生の問題には、方法を変えながら対応し、追い詰めない。

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・社会性（挨拶、報連相、相手の話を聞く、身だしなみ）
- ・学生がどんな考えを持ち、PDCA サイクルに基づいて行えているか
- ・学生の変化（積極性、伸びしろ、学生の目標に対する変化）
- ・対象者への興味を持っているか

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

- ・実習に対する目標を学校と学生が共有し、実習先に伝えておく
- ・身だしなみ（実習先にマニュアルがある場合は、それを提供する）
- ・病期の特性、資料の事前準備（リスク、禁忌に関わること、何の資料を見ると分かるか）
- ・コミュニケーション（視線の合わせ方、言葉遣い）

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・患者様を実験対象として捉えており、自分に合わせてほしいと話していた。
- ・精神科受診のため、数日実習を欠席。精神科受診のことを学校側、実習先も把握できていない。⇒学校側に報告。
- ・課題の未提出に対して付箋の作成。自分から確認してもらう。
⇒発達障害や本人の価値観を把握して、対応することが必要。

感想

学校側への報告は必須。課題の未提出などは、本人の障害の有無や価値観を把握し、こちらの価値観を押し付けずに対応することが重要だと考える。

報告書：演習 4 臨床実習における学生評価

グループ 13 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：牟田沙織 記録者：藤永勇希 発表者：溝口美佐子

学修目標

作業療法臨床実習における教育評価の意義、実習過程での診断的・形成的・総括的評価の内容、基本的態度・臨床技能・臨床思考過程の評価に関する実習指導者と教員の役割、また種々の評価手法、特に OSCE 活用の特長を理解する。さらに問題学生への対応方法について議論し学ぶ。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の積極性や自主性、熱心さ、本当に OT になりたいか
2. 学生の身だしなみや疾患や検査に対する知識
3. 教員への連絡

グループワークで議論された内容

<学生を評価する際に重きを置いている点>

- ・自分から質問するなどの積極性・自主性があるのか
- ・知識も重要だけど、スタッフや患者さんとコミュニケーションがとれるか
- ・担当患者さんの評価や治療など技術面も重要だけど、患者様のことをどれだけ想って患者様と向き合っているか ・レポートなど提出物の提出期限を守れるか
- ・評価や治療の事前準備やスケジュール管理など
- ・OT に興味を持っているか、熱心さがあるか ・一緒に働きたいかなどの社会的態度

<臨床実習に行くまでに学生に備えてほしいこと（態度面、知識面、技術面）>

態度面：学生の身だしなみ（通勤時や臨床中 髪型や服装）や体調管理

知識面：精神科の知識が低い学生が多い、疾患の基本的知識を勉強してきてほしい

技術面：検査に関する基礎知識

<実習で問題が生じた学生と、その対応>

- ・レポートなど提出物を出せないことに関して嘘をつく学生 ・精神的な疾患がある学生、途中からきついですと休むようになった。途中から他の学生を巻き込んでしまう学生
- ・自己判断で何でもしてしまう学生

→対応は学校側や上司への連絡。教員から学生に連絡してもらう。

感想

・疾患に対する知識面や技術面もとても重要だけど、実習中にどれだけ患者様のことを想って向き合えるか、熱心さや積極性がとても大切だと感じた。学校との報連相が大切。

演習 5

多職種連携

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 1 世話人氏名：中村和也

GW 司会者：松浦功嗣 記録者：千北 晃 発表者：中村早央里

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスへの参加
2. 院外職員との連携見学
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・ ケースカンファに参加：場への参加、発言可能な場合はしてもらう（フォローは必須）
- ・ 担当者会議：場への参加、各人の発言の確認
- ・ 軒下カンファ：Ns や SW と密に話す場への参加
- ・ 退院前訪問：院外職員との関わりを見学してもらう
- ・ 院外職員からの連絡：電話での情報提供を受けて、その内容を学生に伝える

感想

院内だけでなく院外での連携も重要だと感じました。分野による働きかけの違いは参考になりました。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 2 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：中山真一 記録者：大垣充 発表者：松尾忠昭

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. 井戸端会議
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

（エクセルシートをコピーアンドペスト）

カンファレンスへの参加（発言は控える 担当患者様の場合は発言の機会あり）

情報収集の際に事前にしっかり考えてから行ってもらい、考え直す機会を持つ

バイザーが多職種と連携（話しなど）している姿を見せる

情報収集、多職種へ説明の場を見せ、説明を行う

介護保険分野において担当者会議への参加

退院前自宅訪問に同行してもらう

井戸端会議の場（日々の連携の姿）を見せる

感想

カンファレンスの場は待たずに来る機会が多くので井戸端会議などの場での連携を見せていくことが重要になると感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 3 世話人氏名： 福島 浩満

GW 司会者： 鶴 智美 記録者： 大曾 史朗 発表者： 川崎 めぐみ

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. リアルタイムでの関わり
2. カンファレンス
3. 他職種の役割の理解

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・リアルタイムで情報交換場面を見せる
こちらから情報提供することで、他職種からも情報を得る機会が増える
精神科では看護師も入っての活動も多いので、普段から日常を見せることができる。
基本的に、まず病棟に出向く。Nsに専門的な内容だけでなく普段から声をかけていく。
- ・実際にカンファレンスに入ってもらおう
担当のみのカンファレンス、病棟全体に伝えるカンファレンスなど様々な場面がある。
リハがカンファを仕切る事も多いので、進め方や考察の仕方、家族への報告なども監視の元、行ってもらおう
- ・病棟で実際の介助方法を他職種に伝達する患者様の変化にも学生が気づくことができる。
- ・訪問場面では、i-padなど利用し他職種での共有。それを利用して、ケアマネ等他職種との連携を学生にも説明できる

感想

普段の関わりを見てもらうことで、情報交換の内容だけでなく連携・協定の築き方を実際に感じてもらう。また、カンファレンスを通して OT の報告だけでなく、他職種がどのような発言をしているかを見学し、他職種の役割を理解する場面としている。基本的には、病棟に足を運ぶ、こちらから声をかける等の姿勢が大切と考える。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 4 世話人氏名： 丹羽 敦

GW 司会者： 西野 十紀 記録者： 古川 拓弥 発表者： 古川 拓弥

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスへの参加
2. 他領域・他事業所の見学
3. 他職種からの説明

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・多職種との連携を見てもらいつつ、各職種に学生に直接、仕事内容を説明してもらう。
- ・多職種が集まる会議に参加してもらい、各職種の役割について感じてもらう。
- ・病院内のカンファレンスに参加してもらう・業務の中で実際に各職種との連携を見せている・各病棟に半日や一日見学に行き、その師長さんなどに説明や体験してもらう。
- ・オペの際のミーティングの際に各職種が様々な説明を行うのでそこで一緒に参加してもらう。また、患者さまの状況や日々の看護の関わりなども一緒に参加してもらう。
- ・新患の情報を一緒に確認し、入院後のカンファレンスに参加してもらう。また、各領域（回復期やデイなど）にも見学に行ってもらい、日々の連携を見ってもらう。
- ・ケア会議の中で他職種について説明する。家屋訪問時などで連携する職種を説明する。
- ・なかなか医者や看護との目的の違いで連携がとりづらい面も・・・
- ・地域包括ケアシステムを基に説明するなど

【方法】・現場を見せる ・他職種とトラブルにならない伝え方のコツを伝える。

感想

基本的には現場での実際の連携場面を見てもらおうという意見が多く聞かれた。他職種に依頼し、業務内容を伝えてもらうという意見も聞かれ参考になった。職域によって、個々で関わる職種も違い、場の確保（ケア会議）がされているところもあった。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 5 世話人氏名：池田朋代

GW 司会者：中山浩介 記録者：永武寛子 発表者：矢島由季

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者や家族の同意
2. 何にでも積極的に参加させる
3. 他職種とのコミュニケーション

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・申し送りやカンファレンスに入ってもらい、その場で学生からも意見を述べてもらう。
- ・スタッフルーム等での職員同士の交流を見せる。
→風通しの良さを見せて、普段からのコミュニケーションや情報共有の場面を見せる。
- ・家族とのムンテラに参加し、家族にも情報収集をしてもらう。
- ・住宅訪問、退院前訪問、地域ケア会議にも参加し、ケアマネや業者さんともコミュニケーションを取る。
→事前に他職種職員へも、学生が評価していることを伝えておく。
- ・患者さんも喜んでくれる。 ・参加することで学生さんの態度面の向上を図る。
- ・患者さんの医者や看護師のサマリーを見せる、書いてもらう。
- ・緩和ケアミーティング→「患者さんの前では言わないこと」などの配慮も伝える。
- ・病棟スタッフの排泄や食事の記録を見せながら、どういったアプローチをするか話す。
- ・他職種が実施している治療場面や回診へも参加させてもらう。

感想

様々な院内・院外での他職種連携の場面へ、学生にも積極的に参加させることで、各職種の役割を知ることができ、患者の全体像を捉えることに繋がる。また他職種と関わることで学生の態度面への向上にも繋がると思う。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 6 世話人氏名： 大坪 建

GW 司会者：原田洋平 記録者：池田龍広 発表者：中野麻里

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 多職種と関わる場面に直接入り、見学や情報交換を一緒にしていく
2. 多職種の視点のポイント等を事前に伝えておく
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

支援カンファレンス、退院前カンファレンスへの参加、可能であれば発言もする

朝礼やミーティングでの情報交換を見てもらう

家族面談に学生も入る

家屋訪問への同行を行う

電子カルテやサマリーを見ながら、情報収集や書類記載の視点を学ぶ

自分の所属以外の関連部署への見学を行う：訪問リハ等

感想

多職種連携は永遠の課題と感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 7 世話人氏名：鎌田 秀一

GW 司会者：栗栖 里恵 記録者：出田 康紘 発表者：山口 萌

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 多職種連携の方法や場面について
2. 他職種への情報提供または情報収集内容について
3. 学生へのフィードバックについて

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

方法・場面

- ・カンファレンスへの参加
- ・科内のケースカンファ参加や症例報告の実施
- ・病棟回診へ参加
- ・退院支援に関する加算や認知症加算など病院機能で行っているカンファへの参加
- ・病院機能で有している緩和・NST などチームへの参加
- ・多職種業務の体験・見学

内容

- ・その日の状態確認、日中の過ごし方、病棟内活動→病棟 Ns 能力について（ADLに必要な起立など基本動作について）→リハ PT 目標設定・在宅調整→カンファレンス
- ・カンファレンスやカルテ情報交換（院内メール）
- ・Dr.やNsへの情報収集などは多職種連携を感じてもらえる

学生へのフィードバック

- ・カンファの意義を詳しく説明

感想

他職種のイメージがないことが多い学生に対し、カンファレンスや回診への参加や地域連携パスの作成などを通し、リハとしての専門性や多職種の専門性を知る機会を設け、多職種協働の必要性を伝えることの大切さを再確認した。また、他職種業務を実際に体験している施設もあり、より他職種の理解をしやすい取り組み方の再検討も必要と感じました。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 8 世話人氏名： 中村 義博

GW 司会者： 長田 朋樹 記録者： 有永 真太郎 発表者： 柴田 真理

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンスへの参加
2. 他施設への情報共有
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

急性期の中でリハビリ時間での経過をカンファレンスに参加し共有、病棟での定着に結びつける。

回復期に転院する患者さんは他院より MSW に来てもらい情報を共有する。

リハビリ目的で入院する患者さんの食事、調理場面を多職種で参加する。

VE・VF 時のポジショニングを行い ST が食べさせる等の連携をしている。

家屋調査、屋外練習時に学生も同行させてもらい、他職種との連携場面を見学してもらう。

リハビリ時以外に看護師に離床時間を作ってもらい、そのために移乗方法の指導を行うことがある。

地域連携パスの利用方法を見学してもらう。

午前中の申し送り時に参加し情報共有を行う。

感想

急性期、回復期等、それぞれのステージで他職種連携の場面が異なり、様々なことを伝えることができると感じた。

連携できていない場面も伝えることが大切であると感じた。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 9 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：琴岡 日砂代 記録者：久保田 智博 発表者：碓 神奈

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 多職種連携
2. 多職種カンファレンス
- 3.

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・軒下とカンファレンスに連れていく。
- ・サマリーの内容を伝える。
- ・PT, ST の見学をおこなう。
- ・入浴、排せつなど日常的にケアされている看護、ケアスタッフと入る。
- ・院内、院外勉強会に連れていく。
- ・退院前訪問。
- ・退院前のケア会議。
- ・地域ケア会議, サロンなど。
- ・リハビリスタッフの回診。

感想

急性期、回復期、維持期それぞれで連携の面が異なっていたため勉強になった。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 10 世話人氏名：井戸佳子

GW 司会者：坂口春香 記録者：内田美代子 発表者：岩永真仁

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス同席
2. 多職種からの情報収集
3. 多職種連携している実際の場面を見せる

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・カンファレンスに同席し、OT が伝えている場面を見てもらう
- ・新患確認時、看護師、ケアスタッフとリハスタッフが入るので、その場面を見てもらう
- ・看護師、ワーカー等からの情報収集を行ってもらおう
- ・退院前訪問に学生も連れていく
- ・褥瘡チームなど病院のチームの話し合いに参加してもらおう
- ・各職種の見学
- ・入院中、ADL 変更、自主運動の変更をする時に、その変更を学生と一緒に考える
- ・ADL 表の確認を学生と一緒にやる
- ・掲示物や資料を作成する時に学生と一緒に考える

感想

多職種で関わっている実際の場面を見せ説明していくことが大切と感じた

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 11 世話人氏名： 早野 和之

GW 司会者：田中 まなみ 記録者： 北川 智恵 発表者：溝口 千絵

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. カンファレンス
2. コミュニケーション
3. フィードバック

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

事前情報やフィードバックを十分に与えながらカンファレンス・デモンストレーションに参加してもらう。

朝のカンファレンスに参加して状態把握や今日することの内容や目的を OT から報告する。病院ではカルテをみることで情報交換ができるが、訪問など在宅分野では情報交換が難しい。時間をかけてでも情報を取り合い、その場面を学生にもみせる。

他職種の愚痴を学生の前では言わないようにしている。

他職種との連携が取りやすいようにコミュニケーションをとる時間の配慮などを学生に伝える。

家屋調査などの場面が設定できれば、事前準備から事後の作業までを一緒に行う。

ミーティング場面で発表の機会を作る。

サマリーに書く内容についても表現の仕方などについて伝える。

合意目標を設定し、共有する。

感想

実際に連携をとっている場面をみせて指導していくという意見が多かった。言葉の使い分けや時間の配慮などについてももしっかり伝える必要があると思った。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 12 世話人氏名：村木敏子

GW 司会者：坂井遥

記録者：馬場奏恵

発表者：上野和子

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 他職種、他事業所とのやり取りで伝え方や社会性を見てもらう
2. 多職種で作る書類で伝え方や業種での役割分担を知ってもらう
3. 普段（軒下カンファ、電話）のやり取りの場面を見てもらう（細目なやりとり）

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

軒下カンファ、退院前訪問 ※事前に学生に情報を伝えてから

- ・ 学生さんに多職種との話す場面を見てもらう
- ・ 自宅での在宅スタッフも交えたカンファレンスを見てもらう（サービス、動作確認）

訪問リハ、サービス担当者会議

- ・ 介護保険分野でのヘルパー、CM とのやりとりを見てもらう（言葉の選び方）

他職種・他事業所との電話のやり取り、地域ケア会議

- ・ 他事業所の方との電話のやり取りを見てもらい、言葉遣い、気遣い（社会性）
- ・ セラピストが入らない会議で発言する場合の伝え方

サマリー、計画書、目標設定等支援管理シート、連携パス、MTDLP

- ・ 送り手によっての言葉遣い、伝え方
- ・ 他職種で作る書類の作り方、業種によっての役割分担

感想

絶対にこのやり方が正しいと伝えるのではなく、失敗談・経験談を伝えていくことも大切だと感じた。事前準備してのカンファや書類作成だけでなく、ちょっとした普段のやり取りを見てもらい、細目なリアルタイムのやりとりが重要だと学生にも感じてほしい。

報告書：演習5 職業倫理および連携論

グループ 13 世話人氏名：塚本 倫央

GW 司会者：藤永 勇希 記録者：溝口 美佐子 発表者：石丸 麻亜沙

学修目標

作業療法臨床実習を円滑に実施するために、倫理観にもとづいた多職種によるチーム連携について理解する。また卒後教育との関連について理解する。

発表の要点（キーワード）

1. いろいろなカンファレンスを見学してもらう
2. 各職種の役割を説明する
3. ADL等の介助方法を多職種へ伝達する場面を見学してもらう

グループワークで議論された内容

<多職種連携を実習場面で学生に伝える方法>

- ・朝の申し送りに学生も一緒に参加させる。言葉が難しい所は後でフィードバックする
- ・家屋調査で、在宅スタッフも同行し、連携をみてもらう
- ・事前に各職種の役割を説明する
- ・カルテで多職種のカルテ記載内容を見てもらう
- ・ST,PTの訓練を見学してもらう
- ・勉強会やオリエンテーションで他の職種の1日の仕事の流れを知ってもらう
- ・ADL変更時の、病棟との話し合いを見てもらう
- ・担当者会議、ケア会議など見学してもらう
- ・通所リハビリでの、介護士やNSとの連携(入浴や送迎時の介助方法)
- ・食事、嚥下訓練の場面

感想

リハビリに関することについては、学生に説明を行っているが、多職種の仕事内容や連携についての説明はまだ不十分であったと感じた。

演習 6-1

MTDLP によるマネジメント過程の 実践

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 1 世話人氏名： 塚本 倫央

GW 司会者：宮崎 祐一 記録者：下濱 太陽 発表者：木山 絵理

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. シート活用
2. 理解
3. 時間

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

○メリット

- ・生活行為向上マネジメントシートを活用することで、目標や全体像を掴みやすい。学生も指導者も。
- ・可視化してあるので、理解しやすい。学生の理解度等。
- ・目標や訓練内容・目的を共有化しやすい。

○課題

- ・指導者側が MTDLP を理解していない。
- ・時間がかかる。
- ・領域によっては MTDLP の利用が難しい。

○疑問点

- ・急性期や精神科ではどう利用したらよいのか。
→急性期では途中まででも回復期等への申し送りを。
→意識障害のある方はできない。インテークが可能な対象者に限る。

感想

- ・学生指導をする立場として、まず MTDLP を自分自身が経験する必要があると感じました。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 2 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：池田佳宏

記録者：大垣 充

発表者：山内良太

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 可視化
2. 共同作業
3. 勉強

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- 流れを捉えやすい
- 学生と一緒にできる
- 可視化できる（できること、できないことなど）
- 全体像の把握がしやすい（社会背景も含め）
- ストレングス・ウイークネスが明確化しやすい

課題

- セラピストも解らないことが多い（経験談）
- リスク管理が滞ってしまった（体験談）
- 満足度・実行度の理解が得られなかった（イメージが得られにくい）
- 実習地が限定されてしまう
- 学校側への提出物が MTDLP シート以外のものがある
- シートを埋めることに一生懸命に陥る可能性

感想

もう少しセラピストも MTDLP の勉強が必要

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 3 世話人氏名：中村 和也

GW司会者： 田川 良枝 記録者： 大曾 史朗 発表者：秀嶋 樹育

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 思考過程の整理
2. 専門領域間での使用の難しさ
3. 包括的アプローチ

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

○メリット ●課題

- 統合と解釈が考えやすい、ICF の整理、他職種との連携を意識できるなど学生が分かりやすい
- OTR も自分自身の考えをまとめやすい。OT が何を考えてるかの思考過程がみえる
- レポートは OTR、OTS 視点の目標になりやすいが、MTDLP であれば他職種も含めた包括的なプログラムを考えやすい
- 学生指導として使用しやすい反面、まとめないといけない情報量が多くパンクしてしまうのでは
- 精神科では使いにくい？→合意形成が得られにくい部分がある。自分について掘り上げることが苦手な方も多い。基本・応用・社会的プログラムにも明確には当てはめにくい
- 精神科では、目標設定から難しい部分がある
- リハに積極的な人でないと使用しにくい印象
- 認知機能の低下のある人には使用しにくい

感想

MTDLP を使用することで、学生指導の中で学生が躓きやすい部分を可視化することができ思考過程をまとめやすいと考える。また、OT 主体の目標だけではなく、他職種、家族をも網羅した包括的なアプローチを展開できると考える。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 4 世話人氏名： 福島浩満

GW 司会者： 森祐花 記録者： 御手洗令美 発表者： 御手洗令美

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 学生の理解度
2. 指導者の理解度・熟練度
3. 対象者・領域

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

○メリット

- ・合意目標を立てるのには有効
- ・患者様の発症からの流れの把握がしやすい
- ・興味関心チェックリストがあると使いやすい
- ・学生にとってはわかりやすい
- ・家族への説明をしやすい

○課題

- ・時間がかかりやすい(一部を使用することで対処した)
- ・指導者の事前の準備や理解が必要
- ・学生が実施する際の対象者選び

○疑問点・気づき

- ・複数の目標をたてた場合、MTDLP にどう落とし込んでいくか
- ・精神障害領域での実践

感想

指導者も繰り返し取り組むことが必要。精神障害領域でも実践できる症例を検討し実施してみたい。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 5 世話人氏名：丹羽 敦

GW 司会者：百武大樹 記録者：矢島由季 発表者：佐藤清美

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 可視化
2. 伝えやすい
3. 指導スキル

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

<メリット>

- ・可視化して共有しやすい 紙面上に残る、どこまで指導が進んだか分かる
- ・1枚のシートにまとまる→指導しやすい ・学生の思考過程の偏りを把握しやすい
- ・指導者の頭の中（思考過程）を学生に伝えやすい
- ・多職種連携、地域の社会資源の理解に繋がる マネジメントの視点
- ・患者・家族にも伝えやすい
- ・指導の役割分担しやすい MTDLP 症例で経験出来なかった評価は、他の患者・指導者が行う

<課題>

- ・MTDLP の研修を受けたスタッフが少ない・経験がないと、指導が難しい。（指導スキルが必要）臨床現場より教育現場の方が、浸透が早いのでは...
- ・指導者側が臨床では使っていない ・本人の意向が確認しにくい場合（認知症、意識レベル）目標設定が難しい ・支援者が少ない場合難しい
- ・指導の時間の確保

感想

臨床現場より教育現場の方が浸透が早いのでは...

臨床現場にどこまで浸透していくか気になる。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 6 世話人氏名：池田朋代

GW 司会者：平川樹 記録者：宮崎光成 発表者：本田秀明

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 活動と参加に焦点を当てやすい
2. 学生や指導者のスキルアップにつながりやすい
3. 指導者の習熟は必要

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

（メリット）

思考過程が可視化できるので、情報共有しやすく、効果的に実習を進めやすい

活動と参加に焦点を当てやすい

学生や指導者のスキルアップにつながりやすい

（課題）

指導者の習熟も必要

評価時間の確保が難しい；カルテ記載やカンファレンス等時間に追われたり、業務効率化を求められている中で、評価時間の確保が難しい

領域によっては使用しにくい場合もある；小児、進行性難病、がん終末期

感想

効果的なツールであるが、指導者の習熟も必要であり、普及には課題もあるように感じた。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 7 世話人氏名： 大坪 建

GW司会者： 山口 萌 記録者： 栗栖 里恵 発表者：本多 麻梨奈

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリット
2. 課題となりそうなこと
3. 話し合いの中で出た疑問点や気になること

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

<メリット>

- ・ある程度型があるので、可視化でき説明しやすい。連携状態がよくわかる。
- ・活動や参加に目が向きやすい。学生の視野が広がる。
- ・ゴールに結びつけやすい。

<課題>

- ・書き出しに時間がかかる
- ・精神科領域ではいつインテークするかタイミングが難しい。
- ・急性期の短い入院期間や機能面も日々変化する中では使いづらい。緩和では可能かも。
- ・指導者が熟知しないといけない。知識、経験。

<疑問点・気になること>

- ・入院中の方が自宅へ帰れない場合があり、使いにくかった。
- ・書き込む量が多いため、自分では業務で使っていない。通常業務と並行しづらい。
- ・他職種にも広めていかねばならない

感想

指導者側が熟知していないと、学生に使用させづらいという意見が多かった。業務と別にシートを作成するという事がしづらく、グループ全員現在自分では使用していない。しかし、部分だけでも使える為、そのような使用方法でしていこうという意見でまとまった。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 8 世話人氏名：鎌田秀一

GW 司会者：有永真太郎

記録者：長田朋樹

発表者：中村勇輔

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP の活用の仕方
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

- ・急性期から回復期への申し送りで使用できそう。
- ・看護実習生が来た時に、対象者の目標を確認することができる。
- ・トップダウンで考えやすい。
- ・患者への聞き取りで目標など具体的に聞けるので、問題点などが焦点化しやすい。
- ・生活行為向上プラン演習シートだけなど、一部分を使用するだけでも、申し送りやベッドサイドでの張り出しで使用することができた。そのことで、看護師や他スタッフとの目標共有がしやすかった。
- ・実習で統一して使用することで、実習の質が維持できそう。

課題になりそうなこと

- ・急性期では入院期間が短いため、使える例に限られる。
- ・患者の疾患や病態によって使用できない。(進行性の疾患、症状が不安定、コミュニケーションが取れない)
- ・学生に指導できるまでスキルが向上していない。またセラピストが理解するにも時間がかかる。
- ・病院内で使用する際は、他職種のチームの中で、共通認識をもつためには周知することが難しそう。
- ・学生がどの程度理解しているのかわからない。

疑問点

- ・目標が上がるが、施設内でできることに限りがあるため、目標設定が難しく、達成度などがつけられない。
- ・時間がかかるので、勤務時間のいつしているのか？

感想

- ・急性期でも聞き取れた範囲で使用できることを学んだ。
- ・養成校ごとに実習時に出る課題に差があるが、MTDLP の資料を提出することで提出課題に当てることができる。
- ・今までのレポートを作成する知識がある前提で MTDLP を作成するので、学生の能力によって難しいのではという意見も上がっていた。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 9 世話人氏名：中村義博

GW司会者：久保田智博 記録者：碓神奈 発表者：高橋弘樹

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習におけるMTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 可視化
2. 学生も理解しやすい
- 3.

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

【メリット】

- ・全体像が分かりやすい。・多職種間で共有しやすい形になっている。・学生と指導者が記入していく部分を可視化しやすいのでどこを一緒に埋めていくか、どこが OTS が重点的に関わって介入するかがわかりやすい。
- ・どこが見落とししているか、どこまで終了しているか誰がみてもわかりやすい。可視化しやすい。
- ・学校で学んでくることがあり基礎があるため、臨床での導入までの期間短縮があり、効率がよい。
- ・学生のレジメ・スライドの代用となりえる。・学生が他者へ伝えやすい形になっている。
- ・予後予測まで踏まえて介入部があるため学生にとってわかりやすい。
- ・整理しているため、患者様への説明・合意にも活用しやすい。

【課題】

- ・仕事で活用するには時間がかかる。・電カルに落とせない。（+αの仕事になる）
- ・シートの枚数が多い、情報量が多い。・小児に特化したとき使用しにくいこともある（興味関心チェックシートなど）。
- ・『生活行為目標』と『合意目標』の折り合いのつけ方に難渋する。・臨床で使用してみないとうまくイメージがつかない。

感想

可視化、言語化する中でセラピストと学生が共有、共通認識が行いやすいツールのため今後活用をすすめたい。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 10 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：本田拓也

記録者：渡部賢治

発表者：内田美代子

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. シートを見ればわかる
2. 学生と一緒に考えられる
3. 時間がかかる

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・一連の流れがまとまっているので理解度など確認しやすい
- ・シートを埋めるだけなので漏れが少ない ・OT の視点を伝えやすい
- ・生活を考えやすい ・学生の目標を確認しやすい
- ・指導者、学生と一緒に考えられる

課題

- ・トップダウンの考え方なので身体機能面を見落とすことがある
- ・時間がかかる ・指導者の理解も必要
- ・どこまで記載させればいいのかわからない
- ・入院では状態の変化がある
- ・例を見せても膨大な量に感じる人がいる
- ・文章化するのが大変

感想

シートを作ることで対象者の状態や学生が考えていること、進捗状況がわかる。
MTLP の利用にあたっては指導者側のスキルアップも必要。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 11 世話人氏名： 井戸 佳子

GW 司会者： 橋爪 陽一 記録者： 岡部 信子 発表者： 小出 将志

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 可視化 イメージ
2. 合意
3. 的が絞れる

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・従来より時間がかからなくなった。
- ・関わりの一連の流れをイメージしやすい
- ・すべき事が可視化できる。
- ・すべき評価を選択できる。
- ・ニーズ先行で合意が得られやすい。
- ・多職種会議などで、的が絞られやすい。
- ・患者さんの想い「目標」を明確に出来る

課題

- ・指導者の事前学習（基礎研修等の受講）での理解が必要。
- ・指導者の実践経験が必要。
- ・まだ理解できていない指導者が多い。
- ・適応患者さんが限られるのではないか。
- ・したいことだけに目が向いてしまう

疑問点や気になる事

- ・シートを用いた指導ができるケースと出来ないケースがある。その判断は？

感想

取り入れている施設とそうでない施設があり、指導者の理解も不十分、十分に活用できていないのでは。指導者自身の慣れと実践が必要。疾患領域や疾病時期等で導入難しいケースも多いのでは。

報告書：演習6-1 MTDLPによるマネジメント過程の実践

グループ 12 世話人氏名： 早野和之

GW 司会者：上野和子 記録者：坂井遥 発表者：城戸よしみ

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 視覚化されているので、学生も指導者も整理しやすい
2. 対象者のプラスの面や、いろいろな視点での評価ができる
3. MTDLP が絶対ではなく、ツールのひとつとして捉えることが重要

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

<メリット>

- ・書類に沿って指導できるので、学生は理解しやすく、指導者の考えも整理しやすい
- ・退院後の他職種との関わりを説明できる
- ・マイナスな面ではなく、プラスの面を見ることができる
- ・評価不足に気づきやすい（機能～生活まで網羅できる）
- ・見える化、一連の施設の共通言語になる

<課題>

- ・書類の量が多い、時間がかかる（オリエンテーション、コーチング）
- ・予後予測は難しい（バイザーがフォローしていく必要はあり）
- ・受け入れ施設側の共通認識・学習が必要（指導者側の力量が重要）
- ・認知症の方、精神疾患の方は症例にしにくい（ご家族の希望を聞いたり、興味・関心チェックリストを活用することで対応できることもある）
- ・ツールをどう使うか

感想

学生と指導者が整理しやすい、という点で MTDLP を活用する利点は大きいと思う。ただこのツールのすべてを伝え、これが絶対に良いという指導をするのではなく、考え方のひとつとして伝えることが重要だと考える。指導者や受け入れ施設が学習することが必要。

報告書：演習 6-1 MTDLP によるマネジメント過程の実践

グループ 13 世話人氏名： 末武 達雄

GW 司会者： 溝口美佐子 記録者：石丸麻亜沙 発表者： 東登志夫

学修目標

MTDLP を活用した作業療法の臨床実践課程を概観し、作業療法参加型臨床実習における MTDLP の活用の仕方を学習し、その特徴を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP による作業療法の見える化
2. MTDLP の適応と限界
3. 効果的な実践例への活用

グループワークで議論された内容

<MTDLP を臨床実習指導に取り入れるメリットと課題>

メリット

- ・ IADL まで見ることができる、退院後の生活まで見ることができる。
- ・ 見落としていたところに気づくことができる。
- ・ 学生さんが、その患者さんのことを、より知ろうとしてコミュニケーションが増える。
- ・ 家族や周りの支援者にも目が向くようになる。
- ・ 1 症例を全体的にまとめる機会になる。
- ・ 他職種との連携が整理しやすい。

課題

- ・ 急性期や精神科では、MTDLP の実践が難しく、具体的な実践例の定着が求められる。
- ・ 実習指導者自体が上手く活用できていない状況なので、学生に指導できる段階に達していない。臨床実習期間中に MTDLP に適合する対象者がいたら、一部分でも良いから、活用してみてもいい。

感想

現状では、MTDLP がその適応には限界があること、指導者の MTDLP の理解が不十分な状況の中、現段階で作業療法の臨床実習全体にその使用を推進するのは時期尚早である気がしました。

演習 6-2

事例報告書の作成

報告書：演習 6-2 事例報告書の作成

グループ 1 世話人氏名： 村木 敏子

GW 司会者：踊瀬 脩大 記録者：田縁 麻衣子 発表者：中村 早央里

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 要点を絞る
2. 口頭での言語化
3. 経過を重視する

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・全体像を捉えるためにも、ICFの問題点をより詳細に文章化する。
- ・一般情報等よりも、目標など治療内容をまず記入したほうが分かりやすい。
- ・一般情報や評価などを最後の考察にまとめているので、項目を分けず全てひとまとめの文章にする。(学生の個性が分かる)
- ・介入経過(前後の変化)をもっと詳細に書く。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・学んできたことを自分の言葉で説明してもらう。(文章だと、書いたあとあまり記憶に残らない可能性もある)
- ・全体を書くとう理解度合いが分からないので、学生が重要だと思う要点を絞って書いてもらう。

感想

事前に記入項目が記載されていると、その枠に当てはめて書かなければいけないと思ってしまう可能性もあるため、対象者に合わせてある程度項目を絞ってもいいのかもしれない。また、文章だけではなく学生自身の言葉で説明してもらうことで、より真剣に考える機会となるし、指導者側も学生の理解の確認もでき、双方にメリットがあると感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 2 世話人氏名：末武達雄

GW 司会者：池田佳宏 記録者：大垣充 発表者：山内良太

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. プロセス
2. 学生との協同
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

ICFからゴール設定 問題点の抽出

プログラム立案にいたるプロセス+バイザーからの助言+備考

MTDLP

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

言語化 コーティング・ティーチング

テスト 実習前に事例を提示し考察し実習後にも再度テスト

感想

過去書いてきた人間としては書くことが当たり前、自分の意識改革をしていく必要性

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 3 世話人氏名： 塚本 倫央

GW司会者： 山崎 結城 記録者：大曾 史朗 発表者：鶴 智美

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP
2. ICF
3. 臨床思考図

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・出来る（強み）部分の項目も必要ではないか。
- ・ICFの関連要素・繋がりまで記載できれば。
- ・MTDLPのシートに加え、経過や考察が分かるものが組み込めればいいのではないか。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・正式な書式じゃなくても、箇条書きでまとめさせディスカッションしながら理解度をみていく
- ・複数提示ではなく、ひとつの項目に絞って評価等から細かく確認していくこと
- ・CEが実際に書面におこして示し、そこから理解度を確認していく
- ・臨床思考図、ICFの図を用いて考えを整理していく。ICFのカテゴリー分けだけでなくその関連する要素まで一緒に確認していく
- ・バイザーを評価する機会を提供する

感想

臨床思考過程の理解に関しては、臨床思考図やICFシートを使用しながら確認していく事や、正式な書式じゃなくても箇条書きでまとめさせ、その学生の考えをもとにディスカッションし理解を深めていく作業を行っている。報告書に関しては、強みを記載できる部分をもっと増やしてはどうかとの意見が聞かれた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 4 世話人氏名：中村 和也

GW司会者：里 優 記録者：内山 雄介 発表者：内山 雄介

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 経過
2. 物語
3. 環境・個人因子

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・テーマをしっかり立てる
- ・経過を重視した報告書（カルテのような）
- ・物語のように書く
- ・環境因子や個人因子につながるような一般情報をもっと入れる
- ・はじめにのところになぜそのテーマになったかを書く
- ・必要な事みの記載
- ・過去（病前）をのせる

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・デイリーノートに体験したことや学んだことを書いてくる
- ・理解できているかをしっかりフィードバックする
- ・セラピストがやったことをカルテに打ち込んでもらう

感想

事例報告書は必要ないものは省いていいのではないか。

学生が理解できているかをデイリーノートなど色んなツールを使って確認し、フィードバックを行うことが重要だと感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 5 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：矢島由季

記録者：佐藤清美

発表者：百武大樹

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP の活用
2. 症例報告会の開催
3. 書面だけではなく、口頭による事例の内容を説明できる

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ICF（環境因子、個人因子、心身機能、活動、参加）、予後予測→目標とその根拠評価はICFにまとめる。
- 指導者の考えを反映、統合。→良いプランができる。
- 評価項目には要らないものもある。
- 発表形式は自由。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- MTDLP マネジメントシートを活用し、口頭で説明してもらう。
- 事例以外の対象者に評価を部分的に行った際にも、根拠・見立てを説明させる。
- 見学・模倣・実施での前後の理解度の確認を行う。
- 実習後に学校で学生と指導者の思考過程の違いも発表する。
- 書くだけでなく、実習地で発表して質問に答える場を設ける。
- 他の学生の発表を聞かせ、ディスカッションする機会を設ける。

感想

従来のレポート中心の実習は学生も指導者も負担が大きいということを再認識した。臨床思考過程の確認の方法は色々あるので、今後工夫していきたい。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 6 世話人氏名：福島浩満

GW 司会者：山重 佳 記録者：原田洋平 発表者：池田龍広

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP の活用
2. 目標にあった評価
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

MTDLP の書式

患者の将来像から聞いていく

予後予測が示されているとわかりやすい

何に着目するかが見えにくい

着目した理由が見えない

目標にあった評価ができていないか

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

コミュニケーション

デイリーノート

マインドマップ

ケースを変えながら、与える情報を段階付け

報告書式を変える

感想

普段考えない内容であり、難しいテーマであった。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 7 世話人氏名： 池田朋代

GW 司会者： 本多麻梨奈 記録者： 山口萌 発表者： 道下貴志

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 生活行為に焦点を当てた報告書
2. 見学模倣実施の徹底
3. デイリーノートの有効活用

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- 生活行為の目標がメインで入ってくる形がよいのではないか
 - 評価は目標に対する評価に絞ってコンパクトにし、その分経過での対象者の変化や学生がポイントを置いた部分に比重をもってくるのはどうか
 - ボトムアップではなくトップダウンの要素を取り込む
- レポートの記載の順番の検討
- 図式を取り入れる

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- 毎回の介入の前後での口頭での確認
- 評価などを整理した後、プログラムを部分的に考えてもらうなど、過程の中の一部をより焦点化して問う（その対象者に合うアクティビティを考えてきてもらうなど）
- 説明したことをデイリーに整理してもらい整合性を確認する

感想

現在臨床の場でも作業に焦点を当てた介入が重要視されてきているので、卒後へのスムーズな移行や指導のしやすさを考えると報告書にはMTDLPなどトップダウンアプローチの流れでの記録へ移行してくるとよいと感じた。学生の臨床思考過程の理解を確認することは難しさを感じていたので他施設での事例を参考に取り入れていきたいと思った。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 8 世話人氏名： 大坪 建

GW司会者： 峰 菜緒 記録者：柴田 真理 発表者：長田 朋樹

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLTの活用
2. 実習中のタイムリーな指導、フィードバック
3. カルテ記入、引き継ぎなどの実践

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・MTDLPのシートを活用した報告書。
- ・問題点、経過、プログラムもわかるように追加する。
- ・問題点、目標を立てた思考過程やどのようなツールを使用したかを書かせる。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・常に、学生とOTが同行しタイムリーに指導、フィードバックしていく。実習時間内に記録などしてもらい、それにもできるだけその日に返す。CCS
- ・学生と一緒に記録（カルテの練習になる）の様式を考え、それを自習中に使用。その日にフィードバック。
- ・OTが休みに入る前の引き継ぎを学生から代行するOTに伝えることをさせる。

感想

指導者側が従来の報告書に慣れているが、これからの実習形態に合わせて思考過程やどう解釈したかを伝える事ができるレポートについて考えていかなければならないと感じた。図式化することも取り入れてみたい。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 9 世話人氏名： 鎌田 秀一

GW司会者： 碓 神奈 記録者： 高橋 弘樹 発表者： 出口 純平

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 一般化
2. 図や画像
- 3.

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・専門的な見方だけでなく一般的な見方を取り入れ、主訴や全体像が伝わるようにまとめる
- ・ボトムアップだけでなくトップダウンの考えを取り入れる
- ・合意目標を記載する
- ・文章だけでなく画像や図を取り入れる

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・症例以外の患者について考察する際に、学生と一緒に考え、思考過程が伝わっているか（評価項目、目標、問題点、プログラム立案などを）質問して確かめる

感想

思考過程を言語化するのは難しいが、第三者に伝えるために可視化することはさらに難しく感じた。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 10 世話人氏名：中村義博

GW 司会者：本田拓也 記録者：渡部賢治 発表者：内田美代子

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. 目標
2. 図式化
3. MTDLP

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・対象者の生活目標を最初を書くなど記載する順番の変更
- ・一つの動作に対する評価、問題点、プログラムの記載
- ・題名
- ・経過を図にする
- ・MTDLPの活用

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・図式化
- ・確認テスト（中間評価・小テスト）
- ・複数スタッフでの確認（担当外のセラピストに説明できる）
- ・コミュニケーションをとる
- ・MTDLPのシートを使用する

感想

MTDLPは今後活用する場面が多いと思われる。

学生の理解度の確認はコミュニケーションをとりながら行う必要がある。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 11 世話人氏名：田中 剛

GW司会者：北川智恵 記録者：前川俊太 発表者：田中まなみ

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点（キーワード）

1. MTDLP
2. 現場での経験
3. 書くことをすべて否定出来ない

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・MTDLPを使用して、追加分はMTDLP事例登録で使用している報告書を使用している。
- ・従来のやり方(ICFにて)。
- ・したいこと(合意目標)、希望、社会背景、生活歴。
- ・多職種のやる事(役割)。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・口答で確認する。
- ・現場での経験を大事にしている(見たこと、体験したこと、感じたこと)。
- ・書かないと整理出来ないかも・・・(書くことは大事)。

感想

書式ではMTDLPを用いることが良いのではないか。書く以外の方法としては口頭で説明することや現場での経験を大事にすることがあった。しかし、書くことで考えを整理できる部分もあるため、書くことをすべて否定できないのではないか。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ 12 世話人氏名： 井戸佳子

GW司会者：城戸よしみ 記録者：馬場奏恵 発表者：榊原 淳

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点 (キーワード)

1. 事例報告書については目標が入っていることが重要
2. 臨床思考過程を確認するなら、事例報告にこだわらなくても良い
3. ディスカッションや学生がしたいことを引き出す

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・問題点
- ・目標(対象者の目標、それを基にした学生の目標)
- ・MTDLPを文章化したもの

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

- ・実習で経験したこと、学んだことの発表(レジュメ) ←学生に事前に事例発表がいいか学んだことの報告がいいか、MTDLPがいいか選んでもらう)
- ・タイムリーなディスカッション
- ・症例検討会
- ・電カルをツールとして、プログラムや経過を整理する(一緒に入力する)
- ・研究の一部を取り上げて一緒に取り組んでもらう(エビデンスも含めて)
- ・失敗の経験(指導者の監視の下、安全に失敗する経験を積む)

感想

臨床思考過程を確認するのであれば事例報告にこだわらなくてもよいのではないかと思います。学んだことの報告やディスカッションなど、学生の意見をいかに引き出すかが重要になってくる。様々な経験から何を感じたか、お互いに話すことが最も大切だと考える。

報告書：演習6-2 事例報告書の作成

グループ _____ 世話人氏名：早野 和之

GW司会者：石丸麻亜沙 記録者：東登志夫 発表者：林 未央理

学修目標

臨床思考過程を踏まえた明確な事例レポート作成の意義・目的を理解する。

発表の要点(キーワード)

1. ICF
2. 臨床思考過程
3. MTDLP

グループワークで議論された内容

<事例報告書をA4・2枚程度で作成するときの内容>

- ・ICFを作る過程が思考過程になるため、図を掲載することで、わかりやすくなるのでは
- ・治療目標に対してなぜこのプログラムを立てたかなどつながりや関係性を表現する項目をだし、問題点、ゴール、治療プログラムの関係性を明らかにしてはどうか
- ・目標を先に立てて、表示することで、評価やプログラムのつながりが見えやすく、伝わりやすい
- ・MTDLPの活用を行うのもひとつの案では
- ・事例報告書の記入方法の順番を工夫し、ゴールを先に示すことで、問題点、治療プログラムの関係性をわかりやすくする。

<学生の臨床思考過程の理解を確認するための方法>

感想

実際に思考過程を紙面で表現することは難しいが、報告書の掲載順番や図の掲載などをおこなうことで、わかりやすくなる。いかに思考過程が大事であるかということを考えさせられた。

演習 7

作業療法参加型臨床実習の理解

報告書：演習7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 1 世話人氏名： 早野 和之

GW 司会者：千北 晃 記録者：松浦 功嗣 発表者：宮崎 祐一

学修目標

見学—模倣—実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 事前の説明
2. 業務時間内

3. 課題の調整

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・リスクの説明を行う。(痛みなど)
- ・代償動作が出現しないように方法の説明をしておく。
- ・事前に目的を説明しておく。(更衣動作等)
- ・事前に内容の説明をしておく。(どこの筋力を測定するか)
- ・学生が説明できれば模倣レベルと判断する。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・終了時間 1 時間前には資料をまとめる時間を確保する。又は空き時間を利用する。
- ・フィードバックも含めて業務時間内に終了できるように努める。
- ・課題の提出の場合はヒントを出して学生さんの負担軽減に繋げる。

感想

各施設時間の管理を工夫しているようだった。

課題の調整により学生さんの体調にも配慮が必要であると感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 2 世話人氏名： 村木敏子

GW 司会者：杉村彰悟

記録者：大垣充

発表者：中山真一

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 予習
- 2.

3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

見学レベル

予習 同意・リスク説明・基本技術の説明 確認 ミニテスト (OK なら模倣へ移行)

目的・内容・方法の説明

観察 視点の説明・一緒に行う

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

バイザーの休みに合わせる (日曜固定休み どこかでもう一回)

土日祝休み

学生に休みを決めてもらう (進捗状況に合わせて考えてもらう)

バイザーが定時に帰る

バイザーが外出時にデイリー等を書かせる

質問に対して実習時間ないで調べる時間を与える

スケジュール管理を行う

感想

3 領域の移行時期はいつ行うのかの判断が難しい

学生の時間の使い方の指導が大切になる

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 3 世話人氏名： 末武 達男

GW 司会者： 日南 雅裕 記録者： 大曾 史朗 発表者： 日南 雅裕

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. リスク管理
2. スケジューリング

3. 養成校との関わり

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫> 見学について

- ・教科書を見ながら事前に確認することが大切ではないか
- ・見学中のやりとりから、理解度（気を付けること・リスク等）を確認し模倣へ移行していく。模倣からの移行後も、模倣と繰り返しながら進めていく
- ・患者様に触れる前にサブスキル（どこに触れてどの程度の抵抗をかけるか）についても指導していく
- ・本当に触らせていいのかは口頭だけでなく、CE で試しながら実施するなど工夫する
- ・リスクの低い方や受け入れの方から導入していく

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・最後の 1 時間はデイリーノートやその日の振り返りや、次の日のやることの確認まで行なう
- ・自主学習として報告書に時間を要した学生がいた。養成校側との課題を統一してほしい。
- ・養成校側がどういう指導をしているかも、CE 側も把握しておく必要がある。養成校側と CE 側の出す課題がかけ離れすぎないことが時間短縮にも繋がる
- ・1 日の中でも学生の自由な時間を設けて自主学習にあてる

感想

45 時間の時間制約の中での効果的な取り組みとしては、学生を担当している CE のスケジュール調整を行ないフィードバックをする時間を設けることや、学生のデイリーノートの作成、調べ物などを実習施設内で終わらせるようにしている。実習後の報告形態が養成校と異なり、レジюмеを新たに作成する作業に時間を要すケースもあるため、養成校側と課題を統一するなどの取り組みが必要との意見があった。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 4 世話人氏名： 塚本 倫央

GW 司会者：園木 雄介

記録者：園田 正司

発表者：園田 正司

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. はじめ
2. ポイント

3. 次の段階

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

見学

ポイントの確認と事後のポイントの確認。

施行過程を説明する。具体的な説明。肩関節の MMT の必要性を説明する

OTR の評価結果と伝える

チェックシートの実施項目の確認

学生がリスク、理解度が十分であれば、模倣に移行する。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

精神分野においては、1 日のスケジュールの中に時間管理がしやすい。

パソコンの使用がほとんどで 1 日の使用時間が無駄に長い→時間制限を試みる

実際の実習中の調べものは自宅にて施行しているので、調べものも時間として使用する。

時間がかかりすぎる場合には学生時間を優先して、セラピストの業務時間を繰り上げ行う

終日は時間を厳守して、残りの 5 時間をレポート作成にさく。

感想

実習の進め方においては、見学-模倣-実施の形にとらわれず、状態や内容によって繰り上げて行う。学生に分かりやすい、取り組みやすい環境の設定が作りが大切だと感じました。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 5 世話人氏名：中村 和也

GW 司会者：馬場 絵理 記録者：百武 大樹 発表者：塩田 聖子

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 口頭説明ができる

2. リスク管理や体調管理

3. 業務時間内にフィードバックできるような効率的な時間配慮

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

・模倣から実施への見極めの方法、工夫について

環境設定やリスク管理を述べてもらう。事前に患者さんへやることを伝えておく。MMT を行う前にどこで痛みがでるかなど ROM-t を理解しておく必要がある。

正確な測定ができていないか確認。どういう目的でやるのか、学生自身が自主的に考える環境作り。評価に集中しすぎずに患者さんの体調管理など周りへの配慮、気づきができているか。

その患者さんへの評価内容が絞れているか確認。リスク管理の前に評価技術の確認。段階付けはできているか。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

業務時間内で時間を効率的に使う。フィードバックの時間を病院に理解してもらう。業務内でフィードバック、デイリーの確認など終わらせる。書類より患者さんに関わる時間を増やす。大事なことはしっかり伝えやすい指導者-学生間の良好な関係作り。事前に課題を明確化。指導者自身の時間管理能力向上。事前に適任な指導者を振り分け。

感想

学生さんにどれだけ時間を作れるか、時間の使い方について考えさせられる。組織レベルで時間確保の環境作りが出来ているところがあり、システムとして参考にしたいと思う。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 6 世話人氏名：牧野 航

GW 司会者：宮崎光成 記録者：平川樹 発 表者：中野麻里

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 患者に行う前に指導者を相手に行う
2. 学生の理解度に合わせ実践レベルを変えていく

3. 空き時間を有効活用していく

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

指導者を相手に

ポイントの確認；1つの動きで可動域もアセスメントする等

測定方法、リスク、患者への説明方法等、口頭で確認

事前にやってもらい、振り返りながら理解度確認

患者を相手に

測定方法やリスクを口頭で確認

模倣する フィードバック

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

空き時間を有効活用；デイリーノート、ケースノートの記載等

記録作成に要した時間を確認し、学生の能力や理解度に合わせて進める

自己学習ノートの作成；課題を減らし自己研鑽の充実を図る

感想

学生の理解度に合わせ、学生の負担にならないよう、効果的な指導方法、時間の使い方を考えていくことは、大切なことではあるが、難しいように感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 7 世話人氏名： 福島浩満

GW 司会者： 道下貴志 記録者： 本多麻梨奈 発表者： 松尾隆太

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 安全に実施できるか
2. 正しい評価方法

3. デイリー（質疑応答やフィードバック）はその日のうちに

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

○指導方法

- ・ MMT 評価を実施する意義の説明
- ・ 対スタッフや学生同士で MMT 評価を行う場面の設定
- ・ MMT 評価の部位、姿勢、注意点などの説明
- ・ 方法を説明し実際にやってみせる

○移行する判断基準

- ・ 模倣レベルでリスク管理や測定方法、姿勢などが口頭説明でき十分に指導を必要としなくなったとき。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・ 帰宅後の時間の使い方や生活リズムを確認した上で、デイリーなどはその日の実習時間内で終わらせられるように見学の時間などを調整する。
- ・ 一人の患者さんについては介入直後に質疑応答やフィードバックの時間を確保する。
- ・ 業務時間内にフィードバックの時間を確保する
- ・ 課題がある場合は何をすればいいかを明確化する

感想

見学-模倣-実施の中でそれぞれ次のステップへの移行の判断基準については患者さんの不利益とならないように（患者さんの状態や学生の技術レベルに合わせて）指導者側がしっかりと判断していかないといけないと感じた。時間の使い方については学生に帰宅後の時間の使い方や生活リズムを随時確認しながら課題の調整や行っていく必要がある。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 8 世話人氏名：池田朋代

GW 司会者：大久保篤史

記録者：中村勇輔

発表者：有永真太郎

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 模倣から実施へ移行するタイミング
2. 都度フィードバックを行う

3. 適宜記録の時間を設ける

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

～模倣に関して～

- ・リスク、関節運動、手を添える場所、MMT 基準の確認、測定ポイントを絞る。
- ・あらかじめ到達目標（実施に至る基準）を伝えておく
- ・対象者に行う前に、指導者で練習する。
- ・できている点をしっかりと褒める。

～実施に移行するタイミング～

- ・指導者の後であれば、改善点がなくなり、特に問題なく模倣できた段階

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・結核病棟等、見学できない時間は記録の時間にする。
- ・16 時からは記録の時間とする。PC を病院に持ち込む。
- ・自宅での課題は極力出さない。
- ・見学に入る前に、視点を必ず伝えておく。
- ・見学後に都度フィードバックをする。(ティーチングになりがち)。
- ・見学の際に記録用紙 (soap 形式) を持ち歩き記載する。

感想

常に指導者に同行させて見学させるのではなく、適宜記録の時間を設ける等の工夫で自宅での学習時間を減らす事ができると感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 9 世話人氏名：大坪 建

GW 司会者：高橋弘樹 記録者：出口純平 発表者：加藤友里夏

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 見学-模倣-実施の指導の工夫
- 2.
- 3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

■実施 ver.

- ・模倣レベルの確認（目的、注意点、実施方法）。
- ・評価後のフィードバック（学生の自己評価を含めて）。
- ・口頭確認をしてイメージを持ってもらう。
- ・実施後の患者さんへの挨拶等（基本的態度）。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・スケジュールを決める（学生の記録やフィードバック時間）
- ・自宅での学習は自己学習
- ・進まない学生には、臨床の時間に調べる時間やレポートをまとめる時間を与える
- ・自宅学習内容の何をするかを明確にする
- ・ある程度考える時間を与え、最終的には教えてあげる

感想

- ・45 時間以内での臨床実習の遂行は、臨床時間などの時間も割いて学習させることも、ひとつ手段と思った。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 10 世話人氏名： 鎌田秀一

GW 司会者： 谷村裕香 記録者： 本田拓也 発表者：折口百合子

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 目的とフォロー
2. スケジュール管理

3.

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

場の雰囲気づくり（患者様に不安を与えない、学生が評価しやすいよう）

実施前に目的や測定する際のポイントを表出してもらう

不十分な箇所があれば補足（リスク、代償動作、声掛けなど）

達成感の確認（具体的に どういったところがよかったか、悪かったか）

評価後患者様への状態を一緒に確認する、患者様からのフィードバック

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

患者様の診る数を制限し、記録の時間を確保する、

学生の記録も OTR の時間にあわせる。空き時間の利用

後からフィードバックするより、タイムリーにフィードバックを実施

デイリーノートは必要か？学生によって必要性の認識に差がある（予め必要性を説明）

感想

○患者様の状態、学生のスキルに応じた対応が必要だと感じる。また声掛けの重要性を再認識した。

○学生のスケジュールだけでなく指導者のスケジュール管理も重要だと感じる。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 11 世話人氏名：中村 義博

GW 司会者：岡部 信子 記録者：溝口 千絵 発表者：橋爪 陽一

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 手技の確認
2. 実施後のフィードバック
3. 自宅学習を減らす

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

○実施の指導方法・工夫点

- ・手技の確認を事前に行ってから実施してもらう。
- ・実施後学生に対してフィードバックを行う。
- ・患者様に学生が実施した後に感想を聞く。
- ・実施する患者様はコミュニケーションが取れる方を選ぶ。
- ・見学、模倣を行った患者様に対してリスク管理を行い実施を行う。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・出席日数に関しては、週休 2 日取れるようにスケジュールを組む。(臨機応変に)
- ・実習時間内で記録の時間を取り自宅学習の時間を無くす。
- ・1日のスケジュールを一緒に考える。(学生がやりたいことも確認する)
- ・フィードバックの時間を決める。

感想

見学-模倣-実施の流れの中で、学生の技量により進捗状況に違いが出て実施まで出来ない学生が多い印象を受ける。学生が行う前後でのフィードバックは大事だと改めて感じた。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 12 世話人氏名：田中 剛

GW 司会者：榊原淳、平野優貴 記録者：坂井遥 発表者：平野優貴、東原太一郎

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点 (キーワード)

1. 直前のオリエンテーション、フィードバックが重要
2. 指導者、学生ともに実習や見学に対する目標を明確にする
3. 指導する時間を作るには職場の理解が必要

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

- ・不安が強い学生は、リスクが少ない人を重ねる
- ・事前のオリエンテーション、事後のフィードバックは必須
- ・対象者の状態に応じて、臨機応変にバイザーが設定する

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・電子カルテを一緒に入力する（見学⇒模倣⇒実施）
- ・記録は時間内に終わらせる（学生にも家での学習時間を伝える）
- ・一週間、毎日のスケジュール・目標を設定する（指導者・学生）

⇒目標への振り返り、中間評価を行う

- ・他病棟など見学に行く前に、それに対する理解度を確認する（指導者、学生双方の目標）
- ・同じことをしても、やり方や相手によって反応が異なることを体験する（応用が大事）
- ・フィードバックの時間を設けるには、職場の理解が必要
- ・隙間時間を活用する（指導者の）

感想

時間を確保するためには、職場の理解が必須。また、実習を効果的に過ごしてもらうためには、指導者・学生ともに一日ごと、見学ごとの目標を明確にし、一致させることが重要だと思われる。時間を活用するために従来の実習の流れにこだわらず、苦手なことを繰り返したり、様々な経験を重ねてもらうことで応用力もついてくると考える。

報告書：演習 7 作業療法参加型臨床実習の理解

グループ 13 世話人氏名：井戸佳子

GW 司会者：東登志夫 記録者：林未央理 発表者：中山理恵

学修目標

見学-模倣-実施の指導方法について、実践場面を想定した演習を行い、作業療法参加型臨床実習の理解を深め、効果的な臨床実習のプログラムを検討し立案する。

発表の要点（キーワード）

1. 効率性
2. リスク管理
3. 時間管理

グループワークで議論された内容

<MMT 評価場面における見学-模倣-実施を基盤とした指導方法・工夫>

【実施】

- ・患者の負担を減らすために、同じ肢位で行えるものはまとめて行う。
- ・(痛みなど) リスクが高い場合は、見学、模倣にとどめる。
- ・事前に学生の知識レベルを把握しておく。
- ・1つ1つを記録すると効率が悪い。
→指導者が記録をすることで、患者さんを待たせず、学生の緊張緩和に繋がる。

<週 45 時間以内という時間の中で効果的な臨床実習を行う工夫>

- ・学校提出の課題 (デイリーノート・ケース) や、フィードバックは実習時間内に行う。
- ・学生担当していない指導者で掃除をするなどの工夫。
- ・その都度、フィードバックを行うと、一日の終わりにフィードバックの時間を取らなくてよくなった。
- ・学生の生活リズムや時間管理をしていく。(スケジュール帳の提案)
- ・その都度、フィードバックの時間が取れない。

感想

学生の知識や体調管理能力を把握して、学生に応じて指導内容・方法を工夫していく必要性を感じました。